

令和五年（二〇二三）三月二十五日発行  
『大倉山論集』第六十九輯抜刷  
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

## 東急東横線の「沿線案内」

—大倉精神文化研究所所蔵資料を中心に—

吉田舞衣

# 東急東横線の「沿線案内」

—大倉精神文化研究所所蔵資料を中心に—

吉田舞衣

## 目次

### 一 全体解題

- (一) 沿線案内発行の歴史
- (二) 東急電鉄株式会社の歴史
- (三) 本稿の目的と凡例
- (四) 結論と課題

### 二 各資料の解題

- ① 東急東横線の沿線案内
  - ② 関連資料群
- 資料一覧表  
年表

一 全体解題

(一) 沿線案内発行の歴史

平成十九年(二〇〇七)、鉄道・運輸機構と相模鉄道株式会社、そして東京急行電鉄株式会社(現東急電鉄株式会社)が日吉駅〜新横浜駅間の路線を新たに開通させることを発表した(東急新横浜線)<sup>1)</sup>。今まで東横線で渋谷方面から新横浜駅へ向かおうとした場合、菊名駅で横浜線に乗り換えて新横浜駅へ出るか、菊名駅から歩いて向かう等の方法しかなかった。しかし、当該路線が開通すれば新横浜駅直通となり、移動時間も短縮される。格段に便利になることは明白であり、一地元民として筆者もその完成が待ち遠しい。

さて、こうした電車の新区間開通等に伴い路線図や周辺利用案内が随時更新されていくが、実は戦前から頻繁に情報を刷新し、利用者へ周知していたことを御存知だろうか。それは、表に「沿線案内」と記されているケースが多いことから「沿線案内」と呼ばれる。沿線案内の定義は研究者によって若干異なるが、<sup>2)</sup>特定沿線の魅力を、名所・旧跡・行楽地を中心に、文章や地図で宣伝した広報物<sup>3)</sup>という点は共通認識と捉えて良いだろう。鉄道事業が開始した明治期より、官鉄は勿論、日本全国の私鉄も軒並み発行していく。では、何故沿線案内が数多く発行されていたのか。その背景をひも解くため、近代日本における鉄道の受容と発展過程を簡単に触れておきたい。

はじまりは、政府主導による近代化政策の一環として計画された。季節や天候によって左右される水上交通や、水運に恵まれない内陸部での非効率な運搬方法(徒歩や牛馬の使用)にとって代わる、安定した物資・労働力輸送網を陸上に整備することにより、西洋に追いつく経済的発展——富国強兵を目指したこと。鉄道網を日本全国に張り巡ら

し、国土の統一、国家意思の伝播を試みたこと。そして、国民へ近代化を視覚的情報で訴え、西洋文明受容の精神的下地を醸成しようとしたことによる。

見事その目的は達成されたが、そのために必要だった最低限の鉄道建設に留まらず、今日の日本を見て明らかのように全国各地で次々と開通し発展を遂げた。それは、国に限らず民間からも物資・労働力輸送網の更なる充実が求められ、鉄道事業が私的な資本投資の対象になりだしたことも一因だが、日本人特有の習俗である「巡礼」行為も重要な理由として挙げられる。すなわち、陸上移動を容易にする手段を見出したことにより、人々は遠方への「巡礼」の利便性を求めて鉄道を待望するようになったのである。<sup>⑤</sup>その要望に応えて出来上がった鉄道会社は、当たり前ながら利益の大部分をそうした利用客が占める事実から、産業輸送を目的としていた鉄道会社も、発展途上にある国内事情により産業輸送のみでは収益が十分見込めないことから、「巡礼」客の輸送、ひいては観光サービスを重視し強化していく。その一つとして、自社沿線の名所らを宣伝する沿線案内の発行が行われたのである。

事業成功・安定の鍵となる、旅客を中心とした利用客獲得争いは凄まじかった。特に、明治期後半には全国の大私鉄国有化・私鉄小規模化が進んだ。大私鉄が持つ観光重視の経営策を包括した官鉄も、影響力を失って短距離且つ人口の少ない郊外輸送が中心となった私鉄も、沿線を盛り立てて人々の利用機会を増やすことが一層要となる。その後起こった昭和恐慌時でも、客の誘引の成功失敗が会社存続を左右したことは言うまでもない。また、単純に近代化に伴う人々の時間的・経済的余裕の発生で、徐々に鉄道利用層が拡大したことも大きかっただろう。

利用客の獲得方法は多岐にわたった。季節・行事毎の臨時列車運行は勿論、電車以外の交通手段も用意し、旅客へ目的地までの利便性をアピール。既存の観光地だけではない。直営の遊園地等を新設して、話題性や目新しさを作ることも有効な手立てだった。一方で、一時的利用ではなく恒常的利用——人々の通勤通学、沿線付近の定住を画策す

る鉄道会社もあつた。住宅地の開発・分譲や有名学校の誘致は、その手段というわけである。また、明治中後期の紀行文の流行<sup>(4)</sup>。東京圏では大正期に都心部の人口増加による郊外への憧れ、上中流階級を中心とした郊外への行楽興味の広がり<sup>(5)</sup>。そういった世間の関心にも鉄道会社は見逃さず、即座に利用していく。

そのほか、鳥瞰図の第一人者である吉田初三郎を中心として描かれた、沿線案内中の美麗な地図そのものが大正末期〜昭和初期蒐集対象になったことや、印刷技術の向上（大量の多色刷印刷物作製の実現）<sup>(6)</sup> という要因も合わせ、沿線案内発行はあらゆるタイミングで必須となっていたと言っても差支えないだろう。

## (二) 東急電鉄株式会社の歴史

本稿冒頭で名前を挙げた東急電鉄株式会社も、沿線案内の発行を含め、前述した方法を駆使して利用客を獲得し成長した代表的な私鉄会社である。

東急電鉄株式会社は、大正七年（一九一八）創立の田園都市株式会社と、大正十一年（一九二二）に田園都市株式会社から鉄道事業部門が独立した目黒蒲田電鉄株式会社（以下、目蒲電鉄）を母体とする。田園都市株式会社は、東京市やその周辺での人口増加、それによって発生している衛生・風紀の問題を解決するべく、郊外の土地を買収して住宅地として開発することを計画。また、住宅地と都心を結ぶ交通の建設、居住者向けの店舗の充実、公園や遊園地といった娯楽施設の設置等、様々なインフラ整備も盛り込んだ画期的な事業であつた。利便性が高いながらも廉価で購入でき、更に関東大震災での被害が大きくなかったことから安全性も話題をよび、大正十一年（一九二二）六月の洗足地区の分譲地売り出しを契機に、田園都市株式会社が開発した郊外住宅地は好調な売れ行きをみせた。昭和三年（一九二八）に目蒲電鉄と合併するまで買収総面積の約三分の二を販売するに至り、残りは目蒲電鉄に委ねることと

なる。<sup>⑦</sup>

目蒲電鉄は、田園都市株式会社からの独立前を辿ると、大正七年（一九一八）に「田園都市株式会社設立趣意書」発起人とほぼ同メンバーが創立した荏原電気鉄道株式会社が最初である。田園都市株式会社が開発する土地を結ぶ路線の敷設免許を得た後、大正九年（一九二〇）にその敷設権利を田園都市株式会社へ無償譲渡するが、同時期に起きた戦後恐慌により田園都市事業自体があまり進まず、鉄道に精通した人間が会社内にいなかったことから鉄道建設は停滞していた。そこで、田園都市株式会社は、元鉄道院官僚であった五島慶太を迎えることにしたのである。その直前には、前述したように、田園都市株式会社からの鉄道事業部門の独立が果たされ、目蒲電鉄が創立。大正十一年（一九二二）九月二日には創立総会が開催され、五島慶太は取締役に就任し、その後専務取締役となった。田園都市株式会社が手がけた住宅地を通っていく目黒駅～蒲田駅間の鉄道開通へ、いよいよ動き出したのである。<sup>⑧</sup>

目蒲電鉄が経営陣に招いた五島慶太は、その時点で既に異なる電鉄会社を率いていた。武蔵電気鉄道株式会社（以下、武蔵電気鉄道）である。武蔵電気鉄道は、明治四十三年（一九一〇）に創立した会社で、後の東横線の元となる「渋谷～平沼（横浜付近）間を含む複数の路線を申請し免許下付されていたが、第一世界大戦好景気がもたらした諸物の価格高騰、そして戦後恐慌と続いたことで創立から十年ほどの間計画は進まずであった。現状を打開すべく、武蔵電気鉄道会長は鉄道院へ鉄道運営等に長けた人物の紹介を求めた。その結果、当時鉄道院内の私鉄を監督する監督局総務課長を勤めていた五島慶太に白羽の矢が立ったのである。

大正九年（一九二〇）、五島慶太は鉄道院を辞職し、武蔵電気鉄道の常務取締役へ就任した。しかし、依然として戦後恐慌の影響は深刻であり、武蔵電気鉄道はついに倒産寸前にまで追い詰められる。武蔵電気鉄道をなんとか立て直すため、丁度舞い込んだ目蒲電鉄の運営を兼任する話を五島慶太は承諾した。武蔵電気鉄道より事業がいくらか進

んでおり鉄道開通予定地域も重なっていた目蒲電鉄を成功させ、その収益で武蔵電気鉄道の事業を進めようと考えたのである。

目蒲電鉄はいよいよ大正十二年（一九二二）三月には目黒駅↷丸子駅（目黒線）間、同年十一月には蒲田駅↷丸子駅（蒲田線）を開通させた。併せて、分譲開始した住宅地の売れ行きも良く、目蒲電鉄の業績は上がっていく。この田園都市株式会社による利益や復興局に売却した土地を主な資金とし、目蒲電鉄は武蔵電気鉄道の株過半数を購入。大正十三年（一九二四）十月の武蔵電気鉄道臨時株主総会では、目蒲電鉄役員が武蔵電気鉄道役員に就任することが決定し、武蔵電気鉄道は商号を東京横浜電鉄株式会社（以下、東横電鉄）へと変え、目蒲電鉄の傘下へ組み込まれたのだった。<sup>(9)</sup>

五島慶太を橋渡ししに共に歩むこととなった東横・目蒲電鉄は、その後様々な事業を展開しながら発展する。大正十五年（一九二六）二月、東横電鉄では丸子多摩川駅↷神奈川駅間（神奈川線）が開通し、同時に目蒲線との相互乗り入れも開始。目黒駅↷神奈川駅間という、東京・神奈川の都心部と郊外が広範囲で繋がった瞬間であった。昭和二年（一九二七）八月には、更に渋谷駅↷丸子多摩川駅間（渋谷線）が開通し、渋谷駅↷神奈川駅間が一本の路線になると同時に東横線という呼称が使われるようになる。並行して、東横電鉄は田園都市株式会社と共同で沿線の土地を購入し、住宅地開発・分譲をすすめた。また、大正十四年（一九二五）に遊園地である多摩川園、昭和二年（一九二七）に綱島温泉を直営で開設。沿線の新名所を生み出した。娯楽施設の新設は東横食堂（渋谷・目黒の二カ所）、ゴルフ場、東横百貨店と続き、それだけにとどまらず、東京高等工業学校（現東京工業大学）や慶応義塾大学予科の誘致、東横学園等教育施設の創立にも力を注ぐ。同時期に乗合自動車事業へ着手したのも、こうして増える各施設と駅・路線を緻密に結びつけるためであったと言えるだろう。

ほぼ同一経営でありながらも事業力の差から、目蒲電鉄とその傘下である東横電鉄という形を長らく取ってきていた両社だった。しかし、昭和九年（一九三四）に目蒲電鉄が、昭和十三年（一九三八）に東横電鉄が、それぞれ競合相手である池上電鉄株式会社（以下、池上電鉄）・玉川電鉄株式会社（以下、玉川電鉄）を吸収合併したのを契機に業績が対等となった。そこで、昭和十四年（一九三九）、東横電鉄と目蒲電鉄は合併し、社名を「東京横浜電鉄株式会社」、つまり東横電鉄へ一本化したのである。勢いは止まることなく、昭和十七年（一九四二）には京浜電気鉄道・小田原急行鉄道も合併し、社名は「東京急行電鉄」に。更に、昭和十九年（一九四四）には京王電気鉄道を合併したことで、いわゆる「大東急」と呼ばれる大私鉄へ成長を遂げた。

しかし、第二次世界大戦を経て、その甚大な被害に加え、社長の五島慶太が公職追放される等の混乱も重なり、事業規模の縮小⇨会社の早期回復を第一に目指すため「大東急」は解体された。京浜電気鉄道・小田原急行鉄道・京王電気鉄道が分離独立し、新たな「東京急行電鉄」として再出発する。その後の流れは割愛するが、戦前の東横電鉄によって敷設・合併した路線は現在の東横線とほぼ変わらない。目蒲電鉄も現在の大井町線・多摩川線を構成し、吸収合併した池上電鉄は池上線、玉川電鉄は一部が田園都市線・世田谷線へ引き継がれている。

### （三） 本稿の目的と凡例

神奈川県横浜市港北区所在の大倉精神文化研究所は、創立が計画されて以来、東横線大倉山駅（創立発表当初は太尾駅、昭和七年（一九三二）三月三十一日に大倉山駅へ改称）に近接するその立地故に、何度も東横・目蒲電鉄沿線の名所として沿線案内中で紹介されている。同時に研究所も、研究所の場所や概要を所外の人々へ簡潔に案内する手段として沿線案内を利用することがあった（資料10）。こうした経緯が明確に判明したことから、研究所では「資

料10】のような創立初期から所蔵していた沿線案内のみならず、沿革史資料——研究所の創立時から現在に至るまでの、研究所創立者の大倉邦彦と研究所に関連した書籍・設計図・写真・書簡等多岐にわたる資料——や、横浜市港北区に関する地域資料の一つとして、近隣の公的機関や個人所蔵している東横・目蒲電鉄発行の沿線案内データ、両社の沿線図が掲載された広告等の資料、池上電鉄・玉川電鉄の沿線案内を蒐集しはじめたのである。併せて、研究所でも東横・目蒲電鉄発行の沿線案内を新たな蒐集対象とした。これらの中でも特に、研究所の地域資料として収められている、寺田秀治氏から大量にご寄贈いただいた資料は、研究所内の沿線案内とその関連資料群の大部分を占めている。

本稿はそれらの紹介とともに、おおよその発行年代の早い順に並べ、比較整理し、内容を検討した結果を述べる。沿線案内は前述したように年・季節ごとに何点も存在し、刊記がなく発行年月日の不明なものが多い（本稿で紹介する資料三十一点のうち二十六点は刊記がない）。そのため、先行研究では数点の資料の紹介に限定され、「戦前」という曖昧な時期区分でしか語られないことが多い。したがって、東横・目蒲発行の沿線案内を網羅的に、そして推定ではあるが発行年代を特定した上で研究することは大きな意味があると言えよう。

具体的には、本稿での沿線案内の定義も、先に明記した「特定沿線の魅力を、名所・旧跡・行楽地を中心に、文章や地図で宣伝した広報物」を踏襲する。これに基づき、大倉精神文化研究所所蔵分を中心に近隣の公的機関や個人所蔵の資料も合わせ、東横・目蒲電鉄発行の沿線案内三十一点（Ⅱ①）。同時代に両社の沿線図が掲載された広告等、池上電鉄・玉川電鉄単体で発行された沿線案内といった関連資料群十六点（Ⅱ②）を掲載する。なお、季節や行楽に特化した広報物（資料13【資料22】等）は、沿線全体に関わる宣伝を中心としていることから沿線案内の定義に該当すると判断し①へ。物や特定の場所を紹介した資料（資料34【資料42】等）は、あくまでその物や場所を中心に

宣伝することを目的としているため②へ分類した。

刊記のない資料の発行年代特定について、資料中で言及されている駅、周辺施設、季節や掲載情報をもとに行っている。しかし、なかには駅名の省略や誤記、情報が先行して記載されている等の矛盾が生じている場合〔資料1〕資料4〕等、詳細は各資料の解題を参照のこと〕もあり、判明したものは随時補足説明をした。利用する際には十分に注意されたい。同じく懸念事項として、判断基準の一つとして各電鉄会社の吸収合併年をとるか、それとも実質的に傘下に入った年をとるか、という問題が浮上する。だが、吸収合併前でも実質的に傘下にある路線を掲載する例が見受けられた〔資料23〕ため、本稿では実質的に傘下に入った年月を採用した。ただし、傘下に入っても発行元に名前を連ねていない例〔資料22〕<sup>10)</sup>もあることに留意する必要がある。また、蒐集資料のなかには戦後発行の沿線案内や別種類の関連資料も含まれているが、比較検討するに十分な数がない故、今回は大正期末〜戦前期の発行物、且つ一部に限定している。

本稿で紹介する資料名ならびに資料内からの引用は、可能な限り通用字体に改めた。その上で資料毎に、資料名・所蔵先（請求番号）・形状と大きさ・発行元・刊記の有無・刊記ありの場合は刊記／刊記なしの場合は推定発行年・概要を記載した。なお、資料によっては所蔵先を複数確認しているが、本稿は一カ所のみを記載した。大倉精神文化研究所所蔵分は沿革史資料と地域資料のどちらかへ分類されており、現在登録作業中の地域資料と一部の沿革史資料を除き、研究所ホームページにて検索可能となっている。加えて、登録の有無にかかわらず原則として全て公開しており、申請手続きをした上であれば閲覧・利用が可能なため、幅広い活用を期待している。ほか、発行年代特定の基準となる、東横・目蒲電鉄、玉川電鉄、池上電鉄、沿線周辺施設の動向を示した年表、資料四十七点分の表紙写真や記載内容を纏めた一覧表も添付したので適宜参照願いたい。

#### (四) 結論と課題

各資料を比較検討した結果、①に分類した沿線案内は、基本的に一枚の紙にモノクロないしカラーで、片面に沿線図、もう片面に情報掲載面を印刷し、それを山折りや谷折りで蛇腹にした縦長リーフレットの形状をしていることが分かった。その上で、沿線図は「開通済の自社線路⇨赤線／未開通の自社線路⇨点線、主要駅の強調、背景色と別色で塗りつぶした都心部」というポイントをおさえた形式〔資料2〕形式と、「開通済の自社線路⇨太い赤線、乗合自動車⇨細い赤線、主要駅の強調、凡例の添付」という形式〔資料12〕形式の二形式あることが判明した。沿線図の裏面にひろがる情報掲載面も、「旅客運賃表」「沿線名所旧跡」といった数項目の情報だけの様相〔資料2〕〔資料3〕等から徐々に変化し、内容が細分化したり〔資料14〕等、更には用紙が拡大して多数の写真が紙面を彩るようになっていく〔資料20〕等。そして、時代が後になるにつれ、季節や行楽の種類に絞ったものも見受けられた〔資料13〕〔資料22〕等。それらは、取り上げるテーマに沿って沿線図や情報を省略・特化し、より人々のニーズに細かく応えることが可能になったといえるだろう。また、②に分類した関連資料群も、①で見えてきた沿線案内沿線図の形式をそのまま、あるいは一部を引き継いでいることが確認できた〔資料3〕と〔資料33〕等。

そして、沿線への客足、特に旅客を増やすことを一番の目的としていた故、①・②どちらの資料も常に新しい情報や話題を載せることを怠らなかった。それを優先するにあたり、掲載対象地域は絶えず変化し、地図としての正確さは二の次になってしまいうケースもあった。時には、時勢の影響を大きく受け、純粹に上述した目的のみを目指すことが出来ない時期もあったのだった。しかし、沿線周辺を遍く掲載し、各年・各季節にたえず何枚も発行されてきた沿線案内とその関連資料は、電鉄の意思や事業力を存分に反映した意欲的且つ重要なものとして、当時の施設の様子や形態を垣間見ることのできる貴重なものとして、鉄道史・観光史・地域史等様々な方面から注目するに十分値する資

料である。

大正期末～戦前期の大倉精神文化研究所蔵分を中心とした資料に限定したものの、他機関所蔵分資料の情報や当研究所蒐集分が今後増加していけば、本稿で述べる検討結果の正確性、新たに判明することも格段に増えていくに違いない。しかしながら、使用方法や配布方法の手がかり、形状（折り方、用紙の大きさ、表紙の位置）変化の意味は掴めなかった。官鉄や他電鉄会社発行沿線案内との比較。名所毎の該当時期の状況や経緯を掲載内容と照合すること。そして、沿線紹介文の詳細な変化を追うことまで探究できなかった点も心残りである。これらについては、沿線案内の発行時期の更なる特定等に繋がるため、今後の必須課題としたい。

最後に、本稿執筆にあたり多大なるお力添えをいただきました、寺田秀治氏、椎橋忠男氏、横浜開港資料館、国際日本文化研究センター、木下富照氏、そして大倉精神文化研究所理事長の平井誠二氏、大倉精神文化研究所研究部長の星原大輔氏にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

## 注

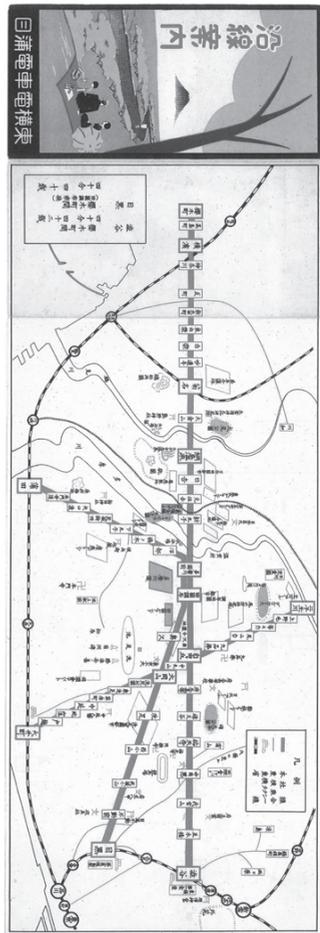
(1) 「相互直通運転実施へ向け速達性向上計画が認定されました」『東日本東海道貨物線横浜羽沢駅付近～新横浜駅付近～東急東横線日吉駅を結ぶ連絡線について』(「企業情報 ニュースリリース(2007年)」、<https://www.tokyu.co.jp/company/news/2007/>、二〇二二年十二月十三日最終閲覧)。

(2) 例えば、奥原氏は「横長の画面上に鉄道会社の路線図を中心として、沿線の名所や史跡、行楽地などを実際の地理的關係を無視し、極端に強調して配置したり、大胆なデフォルメを施して描き込んだ、きわめて主観的な地図である。…(中略)…各社が沿線の観光名所を宣伝し、路線の特色をアピールするために専門画家に依頼して作られ、多くの人々の目を楽しませ

- た。」と説明している（奥原哲志「京王電気軌道会社による沿線行楽地の開発」（奥須磨子・羽田博昭編『首都圏史叢書5 都市と娯楽…開港期～1930年代』、二四三～二七一、二〇〇四年）。また、小川氏は、「特定の鉄道沿線の観光地等を文章や地図で読者に案内するため、鉄道会社等が出版したガイドブックや地図」と定義している（小川功「私鉄「沿線案内」変遷史（1）」（『鉄道ジャーナル』Vol.17 No.8、131～135、株式会社鉄道ジャーナル社、一九八三年）。
- (1) 「（『鉄道ジャーナル』Vol.17 No.8、131～135、株式会社鉄道ジャーナル社、一九八三年）。
- (2) 宇田正「鉄道日本文化史考」、思文閣出版、二〇〇七年。
- (3) 小川功「私鉄「沿線案内」変遷史（1）」、『鉄道ジャーナル』Vol.17 No.8、131～135、株式会社鉄道ジャーナル社、一九八三年。
- (4) 奥須磨子「郊外の再発見―散歩・散策から行楽へ―」（奥須磨子・羽田博昭編『首都圏史叢書5 都市と娯楽…開港期～1930年代』、一九三～二一五、二〇〇四年）。
- (5) 特に、吉田初三郎の人氣は高く、作品の頒布会や蒐集目録発行されることもあった。（小川功「私鉄「沿線案内」変遷史（2）」（『鉄道ジャーナル』Vol.17 No.9、128～131、株式会社鉄道ジャーナル社、一九八三年）。
- (6) 「田園都市会社の創立と目黒蒲田電鉄」（『東急100年史（WEB版）』1-2-1-1、[https://www.tokyuco.jp/history/chapter01\\_2\\_1/](https://www.tokyuco.jp/history/chapter01_2_1/)、二〇二二年十二月十三日最終閲覧）。「土地買収から分譲開始まで」（『東急100年史（WEB版）』1-2-1-2、[https://www.tokyuco.jp/history/chapter01\\_2\\_1/](https://www.tokyuco.jp/history/chapter01_2_1/)、二〇二二年十二月十三日最終閲覧）。
- (7) 「目黒蒲田電鉄の創立」（『東急100年史（WEB版）』1-2-1-4、[https://www.tokyuco.jp/history/chapter01\\_2\\_1/](https://www.tokyuco.jp/history/chapter01_2_1/)、二〇二二年十二月十三日最終閲覧）。
- (8) 「目黒蒲田電鉄が武蔵電気鉄道を傘下に」（『東急100年史（WEB版）』1-2-1-5、[https://www.tokyuco.jp/history/chapter01\\_2\\_1/](https://www.tokyuco.jp/history/chapter01_2_1/)、二〇二二年十二月十三日最終閲覧）。
- (9) 具体的には、「横浜案内」（地域資料／寺田氏寄贈資料）、「旅館下宿案内」（地域資料／寺田氏寄贈資料）等がある。
- (10)

【資料3】沿線案内 沿線図全体(上)、同情報掲載面全体(下)





【資料12】沿線案内沿線図全体

This figure is a cross-section diagram of the railway alignment. The title at the top left is '沿線案内' (Along-line Guide) and '日痛聖地遺構東' (East of the Sun Pain Holy Land Remains). The diagram shows a vertical profile of the railway, with the ground level indicated by a dashed line and the proposed track level by a solid line. The vertical axis represents elevation in meters, ranging from 0 to 100. The horizontal axis represents distance along the alignment. The diagram shows the proposed track layout, including station platforms and tracks, and the ground level. The diagram is oriented vertically, with the top of the page being the north.

【資料14】沿線案内情報掲載画面全体

【資料23】沿線案内情報掲載面全体

沿線案内情報掲載面全体



## 二 各資料の解題

### ① 東急東横線の沿線案内

〔資料1〕 目黒蒲田電鉄 東京横浜電鉄 沿線名所案内



所蔵…研究所（地域資料／寺田氏寄贈資料）  
形状…リーフレット、見開き横778×縦175  
発行…東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社  
発行年…刊記なし、大正十五年（一九二六）新春

河川・電車・富士山を背景に、草花を摘む和服の母娘が表紙。なお、断定はできないものの、描かれている河川は、沿線の名所として名高く、且つ電車が通る大きな

河川として多摩川だと考えられる。

表紙の右側に続く沿線図は、当時一世を風靡した吉田初三郎による地図（初三郎式鳥瞰図）が展開されている。沿線図面を裏返すと、「沿線名所旧跡」として、例えば「熊野神社 太尾 東五丁 光孝天皇勅願所ニシテ関東随一ノ靈験所、境内広ク池アリ老松古杉鬱々トシテ神氣膚ニ迫ルモノアリ」とあるように、名所・最寄り駅・距離が記載され、名所概要が添えられている。また、「沿線ノ主ナル旅客関係年中行事」には、例えば「一月十四日 熊野神社筒粥祭 太尾」とあるように、行事名・最寄り駅のみが記載されている。これらの情報を列挙するに加え、小さな風景写真が三枚、吉田初三郎識「絵に添へて一筆」が掲載。発行年もこれによる。

初三郎式鳥瞰図を象徴する富士山を画面中央に据え、開通済の丸子多摩川駅～蒲田駅間や、完成間近の丸子多摩川駅～神奈川駅間等の自社線路は太い赤線、未開通の自社線路は太い赤点線、他社線路は細い赤線で表されている。駅名は青丸と赤丸とで区別されているが、赤丸に

該当する駅は、東（沿線図右）より、東京・新宿・渋谷・目黒・大井町・丸子多摩川・蒲田・菊名・神奈川であり、主要駅か否かという意味であろうか。また、郊外の開発・分譲地域を示す「田園都市」の文字が横に添えられた駅が、東（沿線図右）より、洗足・奥澤・田園調布・新丸子・元住吉・日吉・綱島温泉・太尾・菊名となっている。

「目黒蒲田電鉄 東京横浜電鉄 沿線名所案内」と称しているものの、描く対象は東京・神奈川圏内にとどまらず、北は北海道（函館）、南は琉球、更には樺太や台湾、釜山まで見て取れる。色彩や景色の表現が非常に豊かな沿線案内といえよう。

【資料2】 目黒・神奈川・丸子多摩川・蒲田間電車案内



所蔵：神奈川県立図書館（資料コード：60143136）

※写真は木下富昭氏所蔵分

形状：リーフレット

発行：東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社

発行年：刊記なし、大正十五年（一九二六）二月十四日

昭和二年（一九二七）三月九日

二つに割れた桃から走り出す電車がモノクロで表わされた、シンプルな表紙だ。

情報掲載面は、【資料1】を引き継ぎつつも掲載写真が削除された。代わりに、「旅客運賃表」「定期乗車券」「回数乗車券」「団体割引」「多摩川園遊覧乗車券」と項目が

多数追加されている。

一方、その裏面でひろがる沿線図は、鳥瞰図から平面図へと転換した。描かれる範囲は、渋谷駅・目黒駅・大井町駅以北を国分寺駅・板橋駅・田端駅、横浜駅以南を小机駅・保土ヶ谷駅（沿線図中は「程ヶ谷」表記）までに限定。駅についても、「田園都市」の文字を添えつても以前の青丸・赤丸（＝主要駅）ではなく、赤丸・二重赤丸（＝主要駅）の組み合わせで表現するようになった。また、白い背景に、赤線は「当社線」、赤点線は「同未成線」、白黒線は「鉄道省線」（国鉄）、黒線は「軌道」、と凡例が明記されている。当時の東京市と横浜市は凡例に記されていない赤色で塗り分けているが、恐らく都心部であることを言いたいのであろう。

この、東京市・横浜市を赤線で結び、「田園都市」の文字が立ち並ぶ沿線図は、大都市間の田園都市を鉄道で結ぶという東横・目蒲電鉄の大元である田園都市株式会社社の理念を如実に、且つ全面に主張していると読み取れよう。

そして、【資料2】のような平面沿線図——開通済の自社線路＝赤線／未開通の自社線路＝点線、主要駅の強調、背景色と別色で表現した都心部——の形式は、今後紹介する沿線案内で一定期間見受けられる基本形式となる。

発行年は、大正十五年二月十四日の東横線丸子多摩川駅～神奈川駅間の開通後から、昭和二年三月十日の東横線東白楽駅の開業前までの間。

【資料3】  
沿線案内



所 蔵：横浜開港資料館（椎橋忠男家文書五一三一―二）

形 状：リーフレット、見開き横537×縦194

発 行：東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社

発行年：刊記なし、昭和二年（一九二七）秋

右上に一房の葡萄が添えられ、富士山を背景に電車が走り出していく表紙となっている。

沿線図は前掲【資料2】とほぼ同形式だが、沿線図内の対象地域は一層狭まっている。特に、渋谷駅・目黒駅・大井町駅以北は、東京市半分（新宿駅～東京駅）のみの記載となった。これに伴い、東京方面の都心部も楕円に、且つ一目で分かるよう赤色で大きく分けられてい

る。なお、楕円型に明瞭に塗りつぶすこの図中表現は、後掲する【資料6】【資料7】【資料8】【資料9】【資料33】にもそっくりそのまま流用していることが確認できている。

情報掲載面からは、「沿線の主なる旅客関係年中行事」が削除された。この後も沿線案内によって微細に変化するものの、当資料のように情報掲載面で「沿線名所旧跡」「旅客運賃表」「団体割引」の三つの項目を提示することが一定期間基本形式となっていく（二八一ページ掲載資料写真参照）。

発行年は、昭和二年八月二十八日の東横線渋谷駅～丸子多摩川駅間の開通後から、昭和三年五月十八日の東横線高島駅開業前までの間。更に、表紙の葡萄のイラストも鑑みるならば、昭和二年秋頃か。

【資料4】 東京横浜電鉄 目黒蒲田電鉄 沿線案内



所蔵…研究所（地域資料／寺田氏寄贈資料）  
形状…リーフレット、見開き横466×縦160

発行…東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社  
発行年…刊記なし、昭和三年（一九二八）十月十五日、  
昭和四年（一九二九）十月二十一日

表紙は、松林に川、富士山を遠くへ望む風光明媚な風景。沿線図は、富士山を画面中央に配置した鳥観図で、仙台から大阪までをも含んでいる。【資料1】と非常に似ているが、吉田初三郎の一番弟子・中田富仙（日本名所図絵社）の手による作画故である。中田富仙が所属する日本名所図会社は当時吉田初三郎とライバル関係にあり、

全国に出来つつあった私鉄の沿線案内図作製を受け持ち対抗していた。<sup>①</sup>

作画の二番煎じ感は否めないが、構成については沿線図を【資料2】、情報掲載面を【資料3】へ依拠しつつ、「沿線名所旧跡」を沿線図下に設けている。この構成をもつ資料は、筆者が調査したなかでは唯一だ。紙をめくらずとも沿線図と同画面で名所旧跡が確認可能になっており、分かりやすい。その「沿線名所旧跡」が移動した分、情報掲載面には十二枚の写真が並んでいる。

発行年は、昭和三年十月十五日の東横線横浜駅の開業後から、昭和四年十月二十二日の東横線九品仏駅↓自由ヶ丘駅改称前までの間。ただし、大岡山駅↔二子玉川駅間の開通は昭和四年（一九二九）十二月二十五日なのでこの発行年間であると工事段階なのだが、沿線図中ではまるで既に開通しているかのように赤線で引かれている。利用者への宣伝目的で前もって掲載していると考えられるか。なお、情報掲載面の「旅客運賃表」には大岡山駅↔大井町駅までしか記載されていない。

【資料5】 東京横浜・目黒蒲田電車沿線案内

所 蔵…研究所（沿革史資料一三二）

九六一三三）

形 状…一枚刷り、横42.4×縦15.9

発 行…東京横浜電鉄株式会社、目

黒蒲田電鉄株式会社

発行年…刊記なし、昭和三年（一九

二八）十月十五日～昭和四年（一

九二九）十月二十一日



【資料4】 から表紙を取り外して中田富仙作画沿線図

のみにした一枚刷り版で、裏面は白紙である。【資料4】

と【資料5】のどちらかが先に作製されたのか。あるいは、

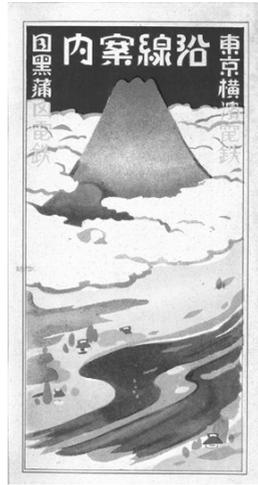
同時に作製されたのか。現時点で断定するだけの根

拠が見当たらない。

発行年は、昭和三年十月十五日の東横線横浜駅の開業

後から、昭和四年十月二十二日の東横線九品仏駅→自由ヶ丘駅改称前までの間。沿線図中の大岡山駅→二子玉川駅間の表記に関しては【資料4】を参照。

【資料6】 東京横浜電鉄 目黒蒲田電鉄 沿線案内



真付きでの紹介だ。また、後掲【資料7】の表紙や内容とはほぼ同じである。

発行年は、昭和三年十月十五日の東横線横浜駅の開業後から、昭和四年十月二十二日の東横線九品仏駅↓自由ヶ丘駅改称前までの間。沿線図中の大岡山駅↪二子玉川駅間の表記に関しては【資料4】を参照。

所蔵…研究所（沿革史資料一二二九六―一二四）

形状…リーフレット、見開き横457×縦153

発行…東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社

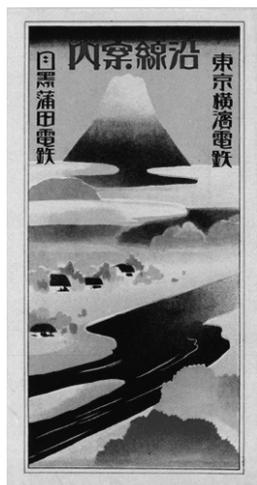
発行年…刊記なし、昭和三年（一九二八）十月十五日↪

昭和四年（一九二九）十月二十一日

本資料は、調査した沿線図では唯一赤い富士山が描かれた表紙を持つ。

開くと、凡例が削除されているものの、【資料3】の沿線図を継承していることが分かる。情報掲載面も【資料3】形式だが、沿線屈指の名所である多摩川園と綱島温泉ラジウム大浴場が他所よりも大きな欄に太字で、写

【資料7】 東京横浜電鉄 目黒蒲田電鉄 沿線案内



十五日の東横線横浜駅の開業後から、昭和四年十月二十  
二日の東横線九品仏駅↓自由ヶ丘駅改称前までの間と推  
定されるため、発行年は昭和三年秋頃、または昭和四年  
秋頃だろう。

所蔵：国際日本文化研究センター（資料ID…

003146792）

形状：リーフレット

発行：東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社

発行年：刊記なし、昭和三年（一九二八）十月十五日～

昭和四年（一九二九）十月二十一日

前述したように、【資料6】と非常によく類似している故、詳細は省略する。しかし、【資料6】の表紙は川辺の木々が緑色中心に色付けされているのに対し、【資料7】は赤や黄色中心となっており、【資料6】と比べて表紙が秋めいている。また、沿線図より昭和三年十月

【資料8】  
沿線案内



所蔵…研究所（沿革史資料一六四五―一二二）

形状…リーフレット、見開き横53.5×縦18.6

発行…東京横濱電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社

発行年…刊記あり、昭和四年（一九二九）十二月

表紙を見ると、多摩川園の螺旋階段の塔に、円で縁取られた富士山と綱島温泉が確認できる。

当資料は【資料6】と同様に見えるが、細かな面で異なる点が散見される。一点目は、沿線図中で日吉駅～元住吉駅間に描かれていた矢上川が消え、綱島桃園の範囲が広がり、慶応義塾大学敷地が記載されていることだ。

矢上川は現在も神奈川県川崎市を流れる河川であり、河

川がなくなった事実はない。しかし、本稿で紹介する資料を見てみると、当資料以降矢上川が登場することは、多摩川・鶴見川と共に釣り場として紹介される【資料29】を除いてはなかった。つまり、地図としての正確さより沿線名所のアピールを優先したと思われる。

二点目として、沿線図中の渋谷駅・目黒駅・大井町駅以北の描かれる地域が広がったことが挙げられる。これまで東京市半分（新宿駅～東京駅）のみだったのに対し、東京市以西（新宿駅～中野駅付近）も描き加えられるようになった。何故その部分が変わったのか。その理由は、異なる三点目の、沿線図中にのびた自社線路を表す赤線よりも細い、新たな赤線表記である。凡例はないものの、後掲【資料10】を鑑みるに、当時開始して間もない連絡バスのルートを案内しているとみていい。<sup>②</sup> そのうち今までの地域だと案内しきれないものは、東横線渋谷駅～省線中野駅間を運行する連絡バスのみである。つまり、連絡バスの発着点をカバーするため、中野駅を含む東京市以西へ範囲を拡大したのでらう。

一方で、情報掲載面は、新区間の大岡山駅～二子玉川駅間の運賃表を追加しつつ【資料6】を踏襲している。

また、後掲【資料9】と掲載内容がほぼ同じである。

【資料9】 沿線案内



所蔵…研究所（地域資料／寺田氏寄贈資料）  
形状…リーフレット、見開き横539×縦188  
発行…東京横濱電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社  
発行年…刊記あり、昭和五年（一九三〇）五月

表紙を除き、記載されている情報が【資料8】とほぼ同じである。しかも、【資料8】の表紙の背景にあった多摩川園が河川へ変わっただけで、当資料の表紙も丸枠で囲われた富士山と綱島温泉がデザインされており、非常に近い。

【資料10】  
沿線案内



所蔵…研究所（沿革史資料一三五〇）ほか複数

形状…リーフレット、見開き横535×縦187

発行…東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社

発行年…刊記あり、昭和五年（一九三〇）十月

表紙下部に描かれているのは恐らく多摩川園の滑り台だろう。これは、昭和二年（一九二七）の第二期拡張工事の際、豆汽車やメリーゴーランドとともに新たに作られた<sup>(3)</sup>。そこで遊ぶ男児を中心に、紅葉と富士山が背景を彩る表紙となっている。

本資料は特筆すべき点が多数ある。沿線図から見てみよう。【資料8】を引き継ぎながらも都心部を表わす塗

りつぶしは綺麗な楕円型から崩れ、大井町駅・大森駅・蒲田駅・川崎駅・渋谷駅・中目黒駅付近へ広がっている。

また、【資料3】以来消えていた凡例が再掲されている。太い赤線の「本社線」に、白黒線の「省線」。そして、新たに加わった、細い赤線で書かれた「連絡バス」と、緑の車体が表わす「東横タクシー」の四例だ。バス・タクシー（乗合自動車）が明記されたのは当資料が初めてある。利便性を強調するとともに、沿線案内を見る人たちへ電車と合わせて乗合自動車をも利用してもらい、利用の相乗効果を生むのが狙いだろう。

情報掲載面は、多摩川園の詳細な利用案内を記載した新項目「温泉遊園地多摩川入園御案内」が目に入る。具体的に挙げると、「普通入園料」から始まり、「一般団体割引率」、「学生生徒団体割引率」、一定の条件下で更に安くなるものが明記された文章等も添えられている。また、「電鉄直営綱島ラヂウム大浴場」の写真も新規カットへ変更している。

そして、大倉精神文化研究所が「沿線の名所・旧跡・

行事」の一つとして初めて挙げられた。

名称 大倉精神文化研究所／最近駅名 太尾／方位  
及距離 北二丁／略記 海拔百五十尺の丘上に聳立、  
竣工（予定昭和六年四月）の暁は規模設備に於て  
世界に誇るべき一大精神文化研究所たるべし

とある。東横電鉄が大倉精神文化研究所を沿線の新名所として、竣工前から大きな期待を寄せていたことがうかがえよう。

また、大倉邦彦も電鉄側へ、昭和五年（一九三〇）十一月五日付で次のように申し出ている。

幣研究所も建築進行と共に漸く世間の知る処となり  
近來諸方面より參觀希望の申込引続有之候、就而：  
（中略）：貴社に於て御配布中の電鉄案内には幣研究  
所の地位も明記あり、略図の代用として使用相叶え  
ば誠に結構なるものと被存候へ共五百部計り御恵与  
被下間敷候哉甚だ厚顔しき御願には御座候へ共何卒  
御聴許被下度奉切願候

研究所見学希望者に位置を分かりやすく伝える手段と

して沿線案内を使用したいため、五百部ほど貰いたいとある（沿革史資料八二一八―一一―一四）。これに対し、電鉄側は僅か二日で返答し、

陳者本月五日付御書面の趣敬承弊社沿線案内五百部  
別便にて御送付申上候間御利用被下度候

と大倉邦彦からの申し出を快諾している（沿革史資料二〇二六五）。

事実、当資料中の大倉精神文化研究所の名前が研究所職員の手書きと思われる赤枠で囲まれており、実際に右のような使い方をしていたと考えられる。

後ほど紹介する【資料37】同様、具体的な使用方法や大倉邦彦の配慮が垣間見えること。そして、電鉄側も、沿線付近の施設が沿線案内をそのように使用することを歓迎、ないし狙っていたことがうかがえる貴重な資料だ。

【資料Ⅱ】  
沿線案内



所蔵…国際日本文化研究センター（資料ID…

003146792）

形状…リーフレット

発行…東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社

発行年…刊記なし、昭和六年（一九三二）一月二十日

昭和六年（一九三二）七月二十四日

表紙は、多摩川橋梁に一機の飛行機が飛ぶ姿を描く。

前掲【資料10】と同内容の凡例が沿線図中右上に記載されている。情報掲載面も【資料10】とほぼ変わらないが、この年開設された玉川ゴルフコースの説明が追加されている。大倉精神文化研究所の説明からは竣工予定

の記述が消えているがこの時点で完成はしておらず、予定日の昭和六年（一九三二）四月を大幅に遅れて昭和七年（一九三二）四月九日までかかることとなる。また、沿線図中では「日本医大」（日本医科大学予科）と書かれたイラストが確認できるが、移転（開校）完了は昭和七年（一九三二）四月十一日であり、後述する推定発行期間中だと完了していない。そうであるにも関わらず掲載されているのは、当時電鉄は利用客の増加を期待して積極的に学校誘致を行っていたため、利用者への宣伝目的で前もって掲載していると考えられるか。

発行年は、昭和六年一月二十日の東横線高島町駅の開業後から、昭和六年七月二十五日の東横線柿ノ木坂駅↓府立高等前駅改称前の間。

【資料12】  
沿線案内



所蔵…木下富照氏  
形状…リーフレット

発行…東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社  
発行年…刊記なし、昭和七年（一九三二）春（三月三十一日）

桜の木の下で家族がピクニックをしている、実に春らしい表紙である。

内容は、これまで受け継がれていた【資料2】形式の沿線図ではない。大きく変化した点は、図中で示す対象地域はそのままに、別色で塗りつぶす都心部表現が消えたことにある。そして、左下には、開業したばかりの桜

木町駅までの所要時間と運賃が記載されるようになった。情報掲載面については、上述した桜木町駅に関する情報が「旅客運賃表」に反映されたほか、【資料10】【資料11】より写真を取り除いた構成となっている。

一方、開通済の自社線路を太い赤線で示して主要駅を強調する点は変わらず維持されており、右上には【資料10】【資料11】の内容を引き継ぐ凡例も確認できる。

この、開通済の自社線路⇨太い赤線、乗合自動車⇨細い赤線、主要駅の強調、凡例の添付という沿線図の新形式は、【資料2】形式に代わり今後の沿線案内へ多く共通するポイントとなる（二八二ページ掲載資料写真参照）。

発行年は、昭和七年三月三十一日の東横線桜木町駅の開業後から、昭和七年十月一日の、東横・目蒲電鉄事務所がある大崎町の東京市品川区編入前。更に、表紙のイラストから、昭和七年春と考えられる。

【資料13】 南郊のピクニック



所蔵…研究所（地域資料／寺田氏寄贈資料）

形状…リーフレット、見開き横19.5×縦17.8

発行…東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社

発行年…刊記なし、昭和七年（一九三二）三月三十一日

（昭和七年（一九三二）九月三十日）

表題にある郊外イメージを彷彿とさせる緑色の表紙が美しい。特徴ある橋のイラストから、多摩川と、多摩川鉄橋梁を走行する電車を描いていることが分かる。

従来の網羅的に情報を掲載したタイプや、後述する

【資料14】のような様々なテーマを情報掲載面に掲載したタイプは、沿線案内を見た人間が利用する場所や目的

をあくまで自主的に選択してきた。しかし、【資料13】は、「南郊のピクニック」と題していわば電鉄側が沿線利用のモデルコースを提示し、それに合わせて沿線図や掲載内容も省略・特化しているのである。紹介されている五つのピクニックルートから例として「(2) 太尾公園より綱島温泉へ」を見てみたい。

大倉山駅下車駅前の坂路を登ること一丁半大倉精神

文化研究所横より太尾公園に至る、梅、桜、つ、じ、

楓、松等観賞樹数千本林間散歩道縦横に走り散策に

適す、之より十五丁、二十分にして綱島温泉に達す、

駅前に電鉄直営のラヂウム温泉浴場あり（入浴料

大人十銭、小児半額）無料休憩所の設備あり。

とある。説明文の下には表があり、出発点である大倉山駅への主要駅からの行き方、終着点である綱島温泉駅からの帰り方が示されている。更に、ピクニックに必須のお弁当も渋谷・目黒の東横マーケットで購入できるといふ至り尽くせり。あれこれ考えずとも電鉄側がピクニックの終始を準備してくれているため、

人々は気軽に赴くことができたのである。

一九一〇年頃から近郊・郊外へ赴き楽しむことが都会人の娯楽となっており、特に一九三〇年代に入ると行楽の一大ブームが出来上がっていたが、このように都心部からみて南の近郊・郊外（「南郊」）へ様々な楽しみ方を求める人々だけでなく、電鉄側も積極的に働きかけ、ブームの相乗効果をもたらしていたのだろう。

しかし、自社線路を太線で示し、新宿駅〜東京駅・新宿駅〜中野駅までの地域を掲載。【資料10】「資料11」と同内容の「電車団体割引」「多摩川園遊覧乗車券」「温泉遊園地多摩川入園御案内」も存在しており、沿線図や掲載内容を省略・特化しながらも実はその根本的な形式は変わっていない。

発行年は、昭和七年三月三十一日の東横線桜木町駅の開業後から、昭和七年十月一日の、東横・目蒲電鉄事務所がある大崎町の東京市品川区編入前。

【資料11】 沿線案内



所蔵…研究所（地域資料／寺田氏寄贈資料）  
形状…リーフレット、見開き横50×縦115g

発行…東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社  
発行年…刊記なし、昭和七年（一九三二）十月一日〜昭和八年（一九三三）三月三十一日

表紙を右から左へ、緑の東横電鉄車両が橋を走る。

沿線図は【資料12】新形式を採用。ただし、凡例に「河川」項目が追加されている点、記載する地域が田町駅〜新宿駅へ僅かに縮小している点と若干の違いが見受けられる。

情報掲載面は、沿線の名所や旧跡等を一纏めにしてい

たのが、①「季節遊覧案内」、②「沿線のスポーツ場」、

③「沿線の娯楽施設」、④「会社経営分譲地」、⑤「沿線の名所旧跡」の五つの項目へ細分化された。

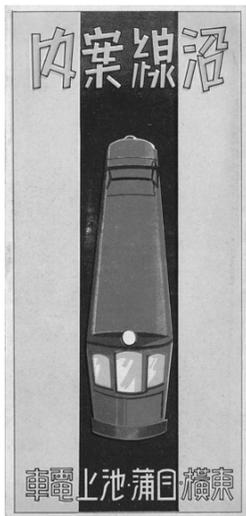
①では、観梅、ピクニック、観桜、鮎魚、納涼、いも掘り、観菊等の小項目が設定され、場所と最寄り駅が記載されている。②・③・⑤では、場所と最寄り駅に加え、概要も添えられている。例えば、②は「運動場 新田球場 武蔵新田駅 慶応大学 野球場」「庭球等々力コート 等々力駅 二丁等々力ゴルフコースの附属硬球コート、入場料一人二十銭、使用料一人三十銭」、③は「綱島温泉 綱島温泉駅 駅前の電鉄直営浴場には無料休憩所、遊技場の設備があり、其他数十戸の温泉宿があります」、⑤は「熊野神社 大倉山駅 東五丁 光孝天皇勅願所にして 関東随一の靈驗地」「大倉精神文化研究所 大倉山 北二丁 海拔百五十尺の丘上に聳立、規模設備に於て世界に誇る 一大精神文化研究所であります」とある。人々の郊外への熱い眼差しと行楽熱に応えるべく、季節毎、沿線利用者の目的毎に電車をより利用し易いよう工夫しはじめた

と考えられる。

こうした【資料3】以来続く「旅客運賃表」「団体割引」といった基本情報と、テーマ別に設定された項目で組み合わせられた構成が、当資料以降主流となっていく（二八二ページ掲載資料写真参照）。

発行年は、昭和七年十月一日の、東横・目蒲電鉄事務所がある大崎町の東京市品川区編入後から、昭和八年四月一日の大井町線中丸山駅↓緑ヶ丘駅改称前までの間。

【資料15】 沿線案内



所蔵…研究所（地域資料／寺田氏寄贈資料）

形状…リーフレット、見開き横530×縦190

発行…東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社、池上電鉄株式会社

発行年…刊記なし、昭和八年（一九三三）四月一日～昭和八年（一九三三）五月三十一日

黄色と黒の縦線に東横電車の緑の車体がよく映え、目を引くデザイン。当資料の発行には池上電鉄が名を連ねており、会社の住所が三社共通となっている。池上電鉄が目黒蒲田の傘下に入るのは昭和八年（一九三三）七月十日であるため、先行して作製されたのであろう。

池上電鉄は、池上本門寺への参詣客を輸送し東京市外への人口増加に対応することを目的に計画され、大正六年（一九一七）六月に会社創立後、大正十一年（一九二二）十月六日に池上駅～蒲田駅間が開通。一時期経営不振や社長の不祥事の発覚があったが、様々な事業に着手し目黒蒲田と競合するようになっていったため、目黒蒲田は池上電鉄の吸収合併を画策し、昭和九年（一九三四）十月一日に池上電鉄株を半分所持することで傘下におさめた。<sup>5)</sup>

開通済の本社線⇨太い黄線／乗合自動車⇨細い白線で表している点、池上電鉄の団体割引表が掲載されている点等若干の例外要素はあるものの、大方【資料12】形式の沿線図と、【資料14】に類似した構成で情報掲載面が作製されている。また、渋谷駅・目黒駅・大井町駅以北を原宿駅～品川駅・中野駅～小金井駅付近、横浜駅以南を保土ヶ谷駅・小机駅へと記載対象地域に変化が見られるが、【資料8】同様の理由によると考えられよう。

発行年は、昭和八年四月一日の大井町線中丸山駅↓

緑ヶ丘駅改称後から、昭和八年六月一日の池上線御嶽山  
前駅↓御嶽山駅改称前までの間。

〔資料16〕 沿線案内



所蔵…個人

形状…リーフレット

発行…東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社  
発行年…刊記なし、昭和八年（一九三三）四月一日〜昭  
和八年（一九三三）七月九日

電車を中央に、多摩川園やゴルフを楽しむ人等のイラ  
ストを四隅の扇型枠中に配置した表紙。

沿線図・情報掲載面ともに【資料12】【資料14】形式  
を保ちながら、情報掲載面ではなく沿線図内上部に写真  
（「駒沢ゴルフコース」「多摩川べり」「綱島温泉」「多摩川  
園」）が並べられているところが新しい。既に写真付き

で何度も紹介されてきた綱島温泉と多摩川園に加え、ピクニックに適した多摩川べり、この前年目蒲電鉄が買収した駒沢ゴルフコースと、この季節、電鉄にとって集客の自信と期待に満ちたスポットだったのだろう。

発行年は、昭和八年四月一日の大井町線中丸山駅→緑ヶ丘駅改称後から、昭和八年七月十日に池上電鉄が目蒲電鉄の傘下に入るまでの間（吸収合併は昭和九年十月一日）。

〔資料17〕 遊覧案内



所蔵…研究所（地域資料／寺田氏寄贈資料）  
形状…リーフレット、見開き横48×縦157  
発行…東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社、池上電鉄株式会社  
発行年…刊記なし、昭和八年（一九三三）四月一日〜昭和八年（一九三三）七月九日

表紙は、多摩川園の鉄塔に虹の橋。そして、最寄り駅である多摩川園前駅を利用する人々が多数描かれており、当時の多摩川園の人気ぶりを表しているようだ。

表紙から既にそうなのだが、当資料は全体が漫画形式となっている。つまり、沿線で楽しむ人々の感想や会話

等が全て吹きだして書かれているのだ。更に面白いことに、都会（当資料では山手線内地域）の描写を見てみると、「ガヤ／＼／＼／＼」「ガタ／＼／＼」「騒音ト都会病」「テモウルサキ限リデアル」「アタシ此頃メランコロイヨ」「オ／＼都会ノ哀愁」という吹きだしと共に青白い顔の人々が密集している。

都会と郊外を対比して都会にはない郊外の魅力を打ち出すと同時に、東横線等がその郊外の田園都市を結ぶ路線であることも強調し、利用者を誘致する狙いがあるといえよう。

発行年は、昭和八年四月一日の大井町線中丸山駅↓緑ヶ丘駅改称後から、昭和八年七月十日に池上電鉄が目蒲電鉄の傘下に入るまでの間（吸収合併は昭和九年十月一日）。

【資料18】  
沿線案内



所蔵…研究所（地域資料／寺田氏寄贈資料）  
形状…リーフレット、見開き横5.5cm×縦10.2  
発行…東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社  
発行年…刊記なし、昭和十年（一九三五）秋（十月三十一日）

黄地の表紙には、沿線での生活や行楽に従事するシルエットが各種見られる。

【資料16】と同じく、沿線図内に写真（「ゴルフコース」「洗足池」「綱島温泉」「本門寺」「多摩川園」）が掲載されているケースだ。また、当資料の注目するべき事項として、池上電鉄が目蒲電鉄に吸収合併されて以降はじめて

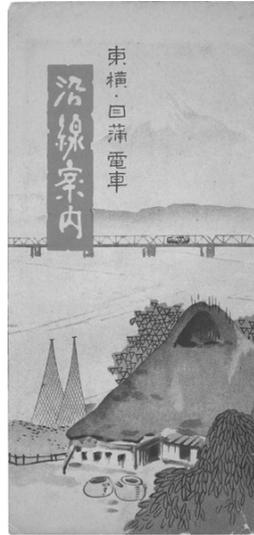
の沿線案内であるという点を外すわけにはいかない。先に紹介した【資料15】【資料17】と比較すると、発行元に池上電鉄の名前が書かれていないにも関わらず沿線図上に池上電鉄が存在し、凡例の「本社線」扱いとされている。情報掲載面は、「連絡切符発売」が削除された以外にさして変わらない。

発行年は、昭和八年七月十日に池上電鉄が目蒲電鉄の傘下に入った後（吸収合併は昭和九年十月一日）から、昭和十年十一月一日の池上線支線である新奥沢線廃止までの間。併せて、太尾（大倉山）スケートリンクの紹介があることから、当該施設のリニューアルオープン間近である昭和十年秋と考えられる（詳細は【資料19】参照）。

また、『東京急行電鉄50年史』では、池上線調布大塚駅・雪ヶ谷駅の合併による雪ヶ谷大塚駅の誕生が昭和八年（一九三三）六月一日とされている。<sup>6</sup>当資料の推定発行年を鑑みると、当資料沿線図中にある調布大塚駅・雪ヶ谷駅の表記は矛盾があるように思われるが、当資料

以降に挙げる資料（【資料19】【資料20】【資料21】【資料22】【資料24】【資料25】【資料26】【資料27】【資料28】【資料30】【資料31】【資料42】【資料44】）でも同事象が多数散見されること。そして、昭和九年（一九三四）七月に創刊された東横電鉄の社内誌『清和』を見てみると、第四巻第五号（昭和十二年（一九三七）五月十日発行）には、昭和十二年（一九三七）六月一日をもって調布大塚駅を雪ヶ谷駅へ合併し新雪ヶ谷駅とする（名称は「雪ヶ谷駅」のまま）旨が記載されていること。<sup>7</sup>この二つの理由より、池上線調布大塚駅・雪ヶ谷駅の合併（＝新たな雪ヶ谷駅の誕生）は昭和八年（一九三三）六月一日ではなく、昭和十二年（一九三七）六月一日と考えるべきだろう。

【資料19】 東横・目蒲電車沿線案内



所蔵…研究所（地域資料／寺田氏寄贈資料）

形状…リーフレット、見開き横532×縦190

発行…東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社

発行年…刊記なし、昭和十年（一九三五）十一月一日

昭和十年（一九三五）十二月三十一日

茅葺き農家の背景に多摩川橋梁・富士山が確認でき、牧歌的な風景が表紙にひろがる。

沿線図・情報掲載面を【資料12】【資料14】形式に沿って作製した典型的な沿線案内である。変更箇所は、情報掲載面の「東横目蒲旅客運賃表」に池上線（五反田駅～蒲田駅）が統合されたほか、「会社経営分譲地」中では

新たな六か所（元住吉、大岡山、諏訪分、久ヶ原、鶴ノ木、雪ヶ谷）追加されている。また、沿線図中の対象地域も渋谷駅・目黒駅・大井町駅以北に僅かな変化が見られ、原宿駅～品川駅・中野駅までに範囲が縮小した。

更に、【資料18】と同じく、「沿線のスポーツ場」中に大倉山スケートリンクへの言及が追加。大倉山スケートリンクは、昭和十年（一九三五）に東横電鉄が地元住民に千円の融資をし、以前から大曾根にあった氷場跡地リンクを沿線の冬の行楽地としてリニューアルしたものである。製氷とは違い気候に左右される天然氷を利用していたため戦争の影響を受けずに済み、昭和十一年（一九三六）一月に開いて以来長い間繁盛した<sup>⑧</sup>。電鉄渾身のスポットだったが故に、沿線案内中でリニューアルオープン時期に先行して記しているのもうなずける。

発行年は、昭和十年十一月一日の池上線支線である新奥沢線廃止後から、昭和十一年一月一日の目蒲線本門寺道駅↓道塚駅改称前までの間。

【資料20】 沿線案内



所蔵…研究所（沿革史資料一二七二四—〇七）  
形状…リーフレット、見開き横33.3×縦35.2

発行…東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社  
発行年…刊記なし、昭和十一年（一九三六）四月一日  
昭和十一年（一九三六）十月二十一日

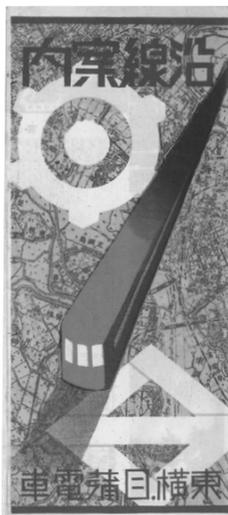
表紙を大きく飾る電車のシルエット中の升目には、様々なモチーフが数パターンで展開されている。

今まで見てきた沿線案内は広げると紙幅が横に長かったが、当資料はほぼ正方形——大きさが二倍になっている。それに伴い、【資料12】【資料14】形式を維持しながら写真を多数掲載することが可能となった。具体的に述

べると、片面は、写真付きの「沿線四季の行楽」項目が上半分、沿線図が下半分。もう片面は、全面を「沿線の名所」「沿線のスポーツ」「会社経営分譲地貸地」「東横目蒲主要駅間旅客運賃表」「多摩川園遊覧乗車券」「団体割引」の六項目と写真で埋め尽くしている。両面合わせて実に二十七枚にのぼる写真の大部分が初めて取り上げられる場所ばかりとなるのは必然だろう。例えば、当研究所（資料中では「太尾公園の梅」の題で掲載）や「綱島菖蒲園」（先行研究では開園期間が昭和八年（一九三三）～昭和十三年（一九三八）頃とされているが、『清和』第八巻第六号（昭和十六年（一九四一）六月三十日発行）に開園告知の記事がある<sup>10</sup>）等、当時の様子が垣間見えて貴重である。

発行年は、昭和十一年四月一日の東横線碑文谷駅→青山師範駅改称後から、昭和十一年十月二十二日に玉川電鉄が東横電鉄の傘下に入るまでの間（吸収合併は昭和十三年四月一日）。

【資料21】  
沿線案内



所蔵…研究所（地域資料／寺田氏寄贈資料）

形状…リーフレット、見開き横380×縦180

発行…東京横濱電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社

発行年…刊記なし、昭和十一年（一九三六）四月一日～

昭和十一年（一九三六）十月二十一日

表紙背景は多摩川と太尾周辺の地図をカラーージュした画像と思われ、上下に配した東京・横浜の徽章の間を赤い電車が走っていく。

沿線図は凡例に変化が現れており、「桃」「梅」「名勝」「城址」「野球場」といった項目が地図記号の如く小さなイラストで表現され羅列している。そのためか、非常に

簡素で平面的な沿線図である。また、紙幅いっぱいまで本社沿線を掲載しており、神奈川方面の掲載対象地域が桜木町駅・小机駅までに縮小した。

情報掲載面は、季節の遊覧案内・分譲地案内が削除された代わりに、前述した【資料20】とは異なるカット写真が情報欄を囲むように配置されている。

発行年は、昭和十一年四月一日の東横線碑文谷駅→青山師範駅改称後から、昭和十一年十月二十二日に玉川電鉄が東横電鉄の傘下に入るまでの間（吸収合併は昭和十三年四月一日）。

【資料22】 春の御案内



所蔵：研究所（地域資料／寺田氏寄贈資料）

形状：リーフレット、見開き横252×縦175

発行：東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社

発行年：刊記なし、昭和十二年（一九三七）春（～五月

三十一日）

鶴見川堤の桜が裏表紙にまで枝を伸ばす、まさに「春の御案内」という表題通りの表紙。

「南郊のピクニック」（資料13）に続き、今度は一つの季節に絞って紹介する沿線案内が登場しはじめた。

「沿線春の行楽」と題し、観桜や観桃が楽しめる五種類のハイキングコース、多摩川園のつつじ人形の呼物等、

およそ三月～五月末頃までの時期に適した行楽を念頭に紹介している。テーマに合わせて掲載内容を省略・特化しているが、小さいながらも開通済の本社線⇨太線⇨乗合自動車等⇨細い点線で引き、対象地域も今までとほぼ変わらない沿線図が添えられている。加えて、【資料20】辺りから主流になりつつある、写真を多数掲載する流れを汲みこんでいるようにも捉えられるか。

また、当資料では発行社欄に名前こそ見当たらないものの、この時既に東横電鉄の実質的傘下に入っていた玉川線が掲載されている点に注目したい。

玉川電鉄は、東京市での建設事業に使用するための砂利輸送を目的とした玉川砂利電氣鉄道と、旅客輸送を目的とした玉川電氣鉄道が合わさり、明治三十六年（一九〇三）十月に創立した私鉄会社である。二つの目的に加え電灯電力事業が玉川電鉄の大きな要であり、また玉川線の終着地点の一つであった渋谷の発展が多大な利益をもたらした。このように、電灯電力事業によって収益を得て渋谷開発の主導権争いに関わる玉川電鉄を東横電鉄

はライブル視するようになり、昭和十一年（一九三六）十月二十二日に東横電鉄が玉川電鉄の株を過半数所持する形で傘下へ組み込んだのだった<sup>11</sup>。

凡例はないが、当資料の沿線図で玉川線に本社線扱いの表現が明確になされていること。そして、玉川線溝ノ口駅が最寄りとなる行楽地「市ヶ尾古墳」が写真付きで紹介されていること。右の事実から、吸収合併以前に傘下の電鉄会社の情報を使用する場合、発行元にその電鉄会社名を記載する（【資料23】）ものだと考えていたが、必ずしもそうではないことが判明した。傘下に入った時点で、発行元としての名前掲載の有無に関係なく沿線情報を活用しているのである。

発行年は、昭和十二年二月二十六日に東横・目蒲電鉄の本社事務所が渋谷へ移転してから、昭和十二年七月二十七日に玉川線と玉川線支線である天現寺橋線の軌道分離までの間。更に、表題や、当資料でつづじ人形の呼物を行う期間を五月三十一日までと明記していることによる。

【資料23】  
沿線案内



所蔵…研究所（沿革史資料二二六四五―二二）

形状…リーフレット、見開き横453×縦307

発行…東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社、

玉川電鉄株式会社

発行年…刊記あり、昭和十二年（一九三七）七月

表紙の電車のイラスト背景を、記念スタンプ風にデフォルメされた沿線名所が賑わせる。

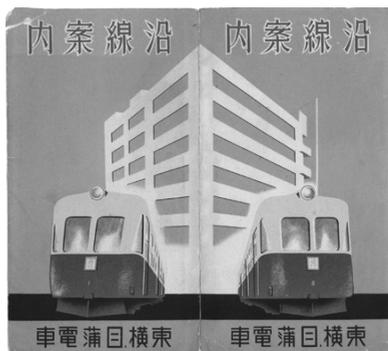
横長より正方形にやや近い当資料は【資料20】と異なり、純粹に片面毎に沿線図と情報掲載面に使用している。

沿線図は、【資料12】の形式に加え、紙幅が倍になったため掲載対象地域が大幅に広がった。新宿駅〜田町

駅、新宿駅～中野駅の範囲に留まらず、下高井戸駅・砩  
駅、更には調布駅まで。神奈川方面も、小机駅の先にあ  
る中山駅や柿生駅が見て取れる。情報掲載面も【資料  
14】形式を保ちつつ、写真をふんだんに掲載した構成に  
（二八三ページ掲載資料写真参照）。

また、本稿で紹介する資料の中では、唯一玉川電鉄が  
東横・目蒲電鉄と共に発行元としている沿線案内である  
（ただし、テーマを絞ったものや、季節にフォーカスし  
た沿線案内を除く）。この時、既に玉川電鉄は東横電鉄  
の傘下に入っており、玉川遊園地・玉川児童園といった  
玉川電鉄沿線の名所が早々に紹介されているほか、「玉  
川線旅客運賃表」欄（下高井戸駅～天現寺橋駅）の新設、  
豪徳寺駅前の分譲地案内の追加といった影響が確認でき  
る。

【資料24】 沿線案内



所蔵：研究所（沿革史資料二二六四五―二二三）

形状：パンフレット、表紙横190×縦170、本紙横617

×縦265

発行：東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社

発行年：刊記なし、昭和十二年（一九三七）七月二十七

日（昭和十三年（一九三八）十一月十八日

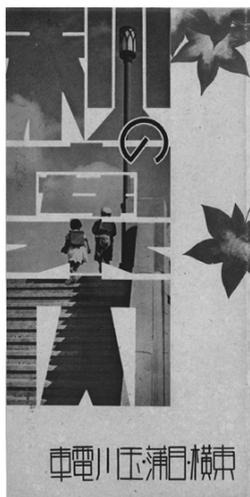
パンフレット形式のため、表紙が見開きで使用されて  
いる。東横百貨店と二両の急行列車が描かれた表紙を裏

へ返すと、「沿線四季の行楽」「社営分譲地案内」の項目。その間に折り畳んで貼り付けられている本紙を広げれば、沿線図と写真を目一杯に使用した情報欄が掲載、という特殊且つ珍しい構造をしている。

内容についても、【資料21】に似て凡例事項の多いことや、案内中の分譲地の増加、描く対象地域の更なる拡大（新橋駅～高田馬場駅、練馬駅付近まで）といった点も特殊だが、殊更そうなのが情報掲載面の「沿線主要学校案内」の項目だろう。例えば、「慶応大学」「駒澤大学」「青山学院」等、現在まで続く学校が勢揃いしている。【資料11】でも触れたが、電鉄が利用客の増加を期待して積極的に学校誘致を行った結果である。また、有名校の移転に伴って学校周辺地域の分譲地販売が加速するという期待以上の効果を生み出した。<sup>12)</sup>

発行年は、昭和十二年七月二十七日の玉川線と玉川線支線である天現寺橋線の軌道分離後から、昭和十三年十一月十九日の玉川線支線である天現寺橋線・中目黒線の東京市電気局委託までの間。

【資料25】  
秋の案内



所蔵：研究所（地域資料／寺田氏寄贈資料）  
形状：リーフレット、見開き横300×縦174

発行：東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社、  
玉川電鉄株式会社

発行年：刊記なし、昭和十一年（一九三六）十月二十二日～昭和十四年（一九三九）三月九日

ランドセルを背負った子供二人の写真が表題の文字で切り抜かれ、表紙を紅葉が舞う。

簡素で小さい沿線図が掲載されているのと同じ紙面には、ピクニックとハイキングが各三コースずつ紹介。日吉の芋掘り・綱島の栗拾い・元住吉の無花果狩りの案内

は、それらに興じる人たちの楽しそうな笑顔が写った写真付き。裏面も同様に、秋の名物呼物だった多摩川園の菊人形展示をはじめとする代表的な行楽場所が大きな写真でその雰囲気을伝えている。だが、実は、当資料の写真の半分ほどは【資料20】【資料23】【資料24】で掲載されたものをそのまま使い回していることに言及しておきたい。

発行年は、昭和十一年十月二十二日に玉川線が東横電鉄の傘下に入った後（吸収合併は昭和十三年四月一日）から、昭和十四年三月十日の玉川児童園（玉川第二遊園地）↓読売遊園への改称前。

【資料26】 春の沿線



所蔵…研究所（地域資料／寺田氏寄贈資料）  
形状…リーフレット、見開き横280×縦155  
発行…東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社  
発行年…刊記なし、昭和十四年（一九三九）三月十日、  
昭和十四年（一九三九）五月三十一日

桜の名所として名高い二子玉川付近をカラー表紙にした資料。

当社線路・乗合自動車・他線を意味する三線と赤丸の主要関連駅で示された簡易な沿線図といい、中の構成といい、「春の御案内」（資料22）とほぼ変わらない。当資料が読売遊園の開園直後、つまり玉川電鉄が開設した

玉川児童園を東横電鉄が読売新聞と提携して改称した際に発行されたため、表紙・沿線図の裏面には園内の「二万坪、六十万球」というチューリップ大花苑が目玉として取り上げられている。

発行年は、昭和十四年三月十日の玉川児童園（玉川第二遊園地）↓読売遊園への改称後から、昭和十四年十月十六日の目蒲電鉄の社名変更までの間。加えて、当資料でつつじ人形の呼物を行う期間を五月三十一日までと明記していることによる。

【資料27】  
秋の御案内



所蔵…研究所（沿革史資料二二三三六—〇五）  
形状…リーフレット、見開き横326×縦123  
発行…東京横浜電鉄株式会社  
発行年…刊記なし、昭和十四年（一九三九）九月～昭和十四年（一九三九）十一月

表紙には、散策を楽しむ女性の姿が色鮮やかに描かれている。

本稿では【資料25】と同じく秋の沿線案内となるが、

比較してみるとその様相は異なるものとなっている。

まずは、沿線図から。これまで見てきたように、テーマや季節に焦点を絞った沿線案内中の沿線図は、その内容に関係深いか、または乗り換え駅など重要なところのみが表示される簡易型が主流であった。当資料もその方向性に変わりないにも関わらず、対象地域はそのままに明らかに【資料25】より掲載される駅数・施設数が増加している（二八四ページ掲載資料写真参照）。中でも特記すべきは、松陰神社——松陰神社前駅（玉川電鉄）、修練道場——溝ノ口駅（玉川電鉄）、豪徳寺——豪徳寺前駅（玉川電鉄）である。主要駅ならびに秋の名所とはとても言い難く、事実これらの箇所を秋の行楽地として紹介する文章は当資料中に一切ない。つまり、別の理由で重要地点として掲載されたのだと考えられよう。では、なにが重要だと捉えられたのか。

四つのハイキングコース、多摩川園の菊人形、日吉の芋掘りといった秋の定番から、読売遊園の秋草大花苑といった新しい場所まで。様々な写真と共に魅力を伝える

その構成にこそ変わりはないが、文章に注目してみたい。例えば、菊人形での説明。

明期東亜の建設、大陸経営の秋。絢爛四十余の菊花大パノラマに豊太閣の全貌を知悉して国民精神の作興を心がくこそ務めてせう

とある。また、沿線図裏の案内の冒頭には、

大陸には偉大なる建設が進み銃後は豊饒の秋を讃える。高い蒼穹、天を衝く意気。逞しいからだ、くろがねの力。健康の秋、みりの秋。秋に描く健康の設計図。さてそれを何処に求めよう……<sup>13</sup>

「秋のみり」と題して「美事になつた秋の実は、銃後の妻の心意気。…（後略）…」ともある。つまり、戦時下の国民として相応しい精神や行動の生成、肉體強化・健康促進の手段として、行楽場所もとい行楽そのものが推奨されていたのである。故に、松陰神社・修練道場・豪徳寺もそうした理由で重要視され、掲載へ至ったのだと考えられる。事実、『清和』第四卷第十号（昭和十二年（一九三七）十月十日発行）の記事「鍛えよ銃後

の秋」では、「銃後の国民として、身体を鍛錬し、精神を涵養する」ため「護国の鬼と化した吉田松陰先生の静かに瞑れる地」である松陰神社で「無言の教訓と激励を得」ることを推奨し、井伊直弼の墓がある豪徳寺へ参詣することで「黒船来航当時の歴史を回顧するも亦、今日の我等にとりて決して益なきことではあるまい」として<sup>14</sup>いる。また、『清和』第八巻第八号（昭和十六年（一九四一）八月二十三日発行）を見ると、修練道場を「国策遂行の根本たる人的資源の増大強化の指導実行機関」と説明している。<sup>15</sup>

都会にはない自然や風景を求め郊外へ足を運ぶこと。それは、人々の身体は勿論、心もリフレッシュする良い機会となっていたであろう。しかし、その純粹な目的による行為は、徐々に戦争の影響を受けつつあったのである。

発行年は、沿線図下に掲載の日曜表——九月から十一月までの日曜・祝日のみを抽出したカレンダーによる。

【資料28】  
ハイキング



所蔵：研究所（沿革史資料一三四七〇—二四）

形状：リーフレット、見開き横26cm×縦18cm

発行：東京横浜電鉄株式会社

発行年：刊記なし、昭和十五年（一九四〇）春

表紙全面に広がった電車のシルエットに、多摩川でハイキングする女性たちの写真が落とし込まれている。

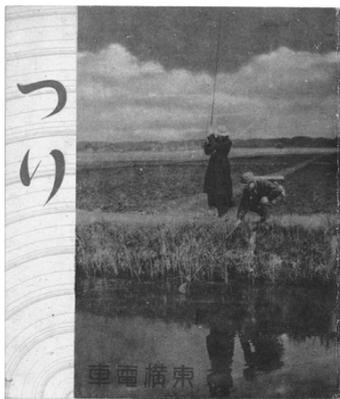
【資料13】に類似したテーマでの沿線案内だが、写真の枚数の多さや紹介するハイキングコースに変化が見られる。沿線図に關しても、【資料27】のように駅数が増えているほか、対象地域内に稲田登戸駅（小田急線）がはじめて登場した。恐らく、この頃五島慶太が小田急電

鉄の取締役に就任したことが大きい。<sup>16)</sup>

写真からは季節の特定ができないものの、沿線図中に「チューリップ大花苑」「多摩川園つつじ人形」の文字、文中に「若草土手のみち」「萌え出づる若草の感覚」「春霞む大倉山」の文言が見受けられることから、春頃のハイキングの案内であるとみて良いだろう。

発行年は、昭和十四年十月十六日の目蒲電鉄の社名変更後から、昭和十五年十二月一日の大井町線二子玉川駅↓二子読売園駅改称（大井町線二子玉川駅・玉川線よみうり遊園駅統合）までの間。更に、右のことから昭和十五年春頃と考えられる。

〔資料29〕  
つり



所蔵：研究所（地域資料／寺田氏寄贈資料）  
形状：リーフレット、見開き横130×縦201  
発行：東京横濱電鉄株式会社  
発行年：刊記なし、昭和十四年（一九三九）十月十六日  
～昭和十五年（一九四〇）十一月三十日

田園の川縁で釣りを楽しむ人の写真を使用した表紙。以前から夏～秋頃の行楽の一つとして紹介されていた「川釣」や「鮎漁」をピックアップし、より詳細に案内したのがこの資料である。

沿線図内では、【資料8】以降ほぼ書かれることになった矢上川が復活し、多摩川・鶴見川と並び釣りを楽しむ上での重要な河川と位置付けられている。ほか、「石川台駅」「荏原町駅」「中耕地駅」といった池・釣堀のある場所の最寄り駅が記載。かつてテーマ別沿線案内では出てこなかった駅が目白押しである。裏へ返せば、川の絵を中心に橋・ダム・渡の場所や、各ポイントで釣れる魚の種類が細やかに提示。釣具の販売場所として東横百貨店への案内もあつて抜かりがない。テーマが異なれば、沿線図内の情報も大きく変化する。その実例を示す興味深い資料だ。

発行年は、昭和十四年十月十六日の目蒲電鉄の社名変更後から、昭和十五年十二月一日の大井町線二子玉川駅→二子読売園駅改称（大井町線二子玉川駅・玉川線よみうり遊園駅統合）までの間。

【資料30】  
アルキマセウ



所蔵：研究所（沿革史資料二二二九六一二二）  
形状：リーフレット、見開き横359×縦127  
発行：東京横濱電鉄株式会社  
発行年：刊記あり、昭和十七年（一九四二）四月十日

表紙の写真では、リュックを背負った子どもが片手をあげている。

この頃の東横電鉄は、様々な私鉄を買収し、社長の五島慶太が京浜電気鉄道・小田原急行鉄道の社長をも兼任

していた<sup>17)</sup>。そのため、掲載されている沿線図も主要駅のみの簡易型ながら路線数・対象地域が大幅に変化している。具体的には、前述した小田原線（江ノ島線を含む）や京浜線（湘南電気鉄道を含む）、神中線、帝都電鉄（現京王井の頭線）。地域も、吉祥寺駅〜立会川駅、大秦野駅と東西へ大きく広がった。中の内容も、路線増加による乗客の行動範囲拡大により、八つのハイキングコースが提案されるようになった。

一方で、戦時下を意識させる催しも見受けられ、多摩川園では「輝く大東亜博覧会」が開催されていた（会期は三月十二日〜五月三十一日）よう、大東亜こどもの世界」「米英東亜侵略史」「八紘一宇の塔」等の展示名が記載されているが、詳細は不明である。

【資料31】 沿線案内



所蔵：研究所（沿革史資料二二六四五―一三二）  
形状：リーフレット、見開き横602×縦300

発行：東京横浜電鉄株式会社

発行年：刊記なし、昭和十五年（一九四〇）十二月一日

昭和十七年（一九四二）四月三十日

緑地の表紙に、電車の写真で構成された東横電鉄のマークが中央を飾る。

【資料12】【資料14】形式ながら、凡例の内容が多く、対象地域も異常に広い。詳しく見ていくと、本社線十一路線の始点〜終点の記載、「守れ要塞防げよスバイ」・「要塞地帯ニ於テハ許可ナクシテ要塞地帯内ニ於ケル水

陸ノ形状ヲ測量撮影模写録取シ又ハ航空スルコトヲ禁ゼラレテ居リマス」の文字、鎌倉・極楽寺く屏風浦を直線で結び東京湾まで伸ばした「要塞地帯区域線」が加筆されている。

また、注目すべきは、「沿線名所案内」中「大倉山」の項に東横神社の記述が追加された点だろう。東横神社は、太尾公園内の梅林の北東部に造営され、昭和十四年（一九三九）六月二十二日に伊勢神宮より天照大神・豊受大神を勧請。一般に公開していないが、変わらず在り続けている神社だ。社員の心の拠り所とするとともに、会社発展に貢献した功労者への感謝、またその霊を慰める目的があり、洪沢栄一や後には五島慶太等が合祀されている<sup>18</sup>。戦時中には、『清和』第七卷第四号（昭和十五年（一九四〇）四月十日発行）にて、日中戦争で亡くなった社員の慰霊祭を東横神社で挙行された旨を巻頭で紹介しているように、戦地で亡くなった社員も英霊として東横神社で慰霊し、合祀された<sup>19</sup>。あくまで一会社の保有する神社が、突然と、わざわざ掲載されるその背景には、

時勢が大きく絡んでいるのである。

発行年は、昭和十五年十二月一日の大井町線二子玉川駅↓二子読売園駅改称（大井町線二子玉川駅・玉川線よみうり遊園駅統合）後から、昭和十七年五月一日の東京急行電鉄へ改称するまでの間。ただし、沿線図右上欄外に「昭和十四年十二月廿六日東京湾要塞司令部地乙第二〇〇号許可済／昭和十四年十二月廿日横須賀鎮守府第六一号ノ一七一二許可済／被許可者五島慶太」と記載あり。

② 関連資料群

【資料32】 池上電車案内



所蔵…研究所（地域資料／寺田氏寄贈資料）

形状…リーフレット、見開き横536×縦190

発行…池上電気鉄道株式会社

発行年…刊記なし、大正十二年（一九二三）五月四日～

大正十五年（一九二六）八月五日

表紙を飾るのは、洗足池らしき水辺を走る赤い電車。

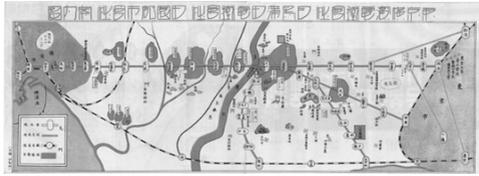
当時の池上電気鉄道の車体が赤だったのかどうか、残念ながら特定することはできなかった。

左上に小さいながらも富士山を含む鳥瞰図である点。

開通済の自社線路を太い赤線、未開通の自社線路を太い赤点線、他社線路を細い赤線で表し、駅名を大小の赤丸

で強弱をつけている点は【資料1】と似ていよう。一方で、情報掲載面に主要駅からの運賃表や種々の割引表を掲載しており、【資料1】と比べると目新しさを感じる。発行年は、大正十二年五月四日の池上線池上駅～雪ヶ谷駅間の開通後から、大正十五年八月六日の池上線慶大グラウンド前駅の開業前までの間。

【資料33】 東京横浜電鉄株式会社新株式売出



所蔵：研究所（地域資料／寺田

氏寄贈資料）

形状：一枚刷り、横540×縦387

発行：東京横浜電鉄株式会社、

山一証券株式会社

発行年：刊記なし、昭和二年（一

九二七）八月（～八月十五日）

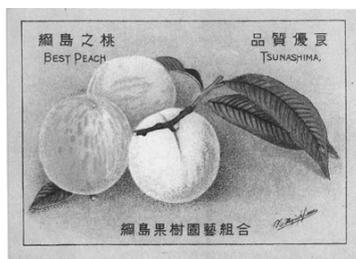
間開通工事資金を得るためとしている。

多くの人に投資してもらおうべく、「東洋第一の貿易港たる横浜市の中央駅と帝都の裏半面とを結び付けたるもの如きは利廻の如何を問はず絶好の投資物である」と投資価値を述べ、渋谷横浜間が繋がった暁には省線と同値段且つ省線より短い時間で移動できるため、省線の利用客を吸収でき収益増加が見込めるとアピールしている。一方、沿線図は、「等々力ノ滝」「慈雲寺」等一部名所の削除、「箕輪池」の着色漏れがあるものの、【資料3】とほぼ同じものを使用している。また、完成間近とはいえ未開通である丸子多摩川駅～渋谷駅間が赤線で結ばれるという矛盾が生じている。

表題の通り、東横電鉄の新株式売り出しの案内。売り出し値段は一株につき十五円以上、申込証拠金は一株五円で、限定五千株の応募となっている。株式売り出しの目的は、丸子多摩川駅～神奈川駅間・丸子多摩川駅～渋谷駅間の開通工事、田園都市経営地買収の三事業の際に発生した借金の返済資金。そして、神奈川駅～桜木町駅

発行年は、株式の受け渡し期間が「昭和二年九月一日ヨリ三日迄…（後略）…」と設けられていることや、東横線丸子多摩川駅～渋谷駅間の開通を「本月中旬」と記していることから、東横線丸子多摩川駅～渋谷駅間の開通した昭和二年八月（二十八日）となる。更に、売り出し期間を八月十五日までとしているため、それによる。

〔資料34〕 出荷用ラベル（「綱島之桃 品質優良」）



所蔵・研究所（地域資料）

／寺田氏寄贈資料）

形状・一枚刷り、横10.3×

縦7.4

発行・綱島果樹園芸組合

発行年・刊記なし、昭和二

年（一九二七）八月二十

八日（昭和三年（一九二

八）五月十七日

綱島の特産品であった桃の出荷用ラベル。桃は水害の多い綱島での栽培に適しており、特に綱島産は大正十一年（一九二二）の東京博覧会や各地の品評会で高く評価され、昭和十三年（一九三八）の大水害によって生産量が激減するまで全国に名を馳せていた。<sup>20</sup>出荷に際し、荷車より安全且つ迅速に運べることから東横線が利用されていたのである。<sup>21</sup>

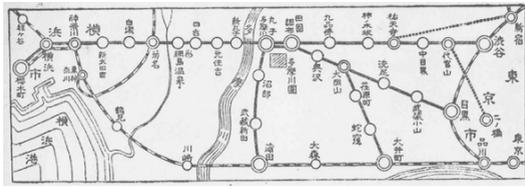
「品質優良」と謳う三つの「綱島之桃」の絵は表に。

中国の神仙西王母の伝説にちなんだ宣伝文と「綱島温泉交通略図」（沿線図）は裏に。縦の長さが僅か三〜四センチほどしかないにも関わらず、東横・目蒲電鉄以外の対象地域は渋谷駅〜田町駅・小机駅までとなっており、凡例の揭示や、東横電鉄線路と他線路の区別、省線連絡駅を二重丸で表わす等、今まで紹介してきた沿線図形式と変わらない。また、生産地最寄駅である綱島温泉駅付近一帯を濃く塗りつぶし、「綱島 桃林」と大きく書いている。

東横線を出荷ルートに使用していた事実に加え、購入者へ産地場所を知ってもらうための最適な方法として沿線図を裏面に載せたのである。

発行年は、昭和二年八月二十八日の東横線渋谷駅〜丸子多摩川駅間の開通後から、昭和三年五月十八日の東横線高島駅開業前の間。

【資料35】 東京横浜電鉄株式会社事務用箋（「大倉精神文化  
図書館建築用砂利数量金額表」）



所蔵…研究所（沿革史資料六四  
三五—〇一）  
形状…便箋、横13×縦23.6  
発行…東京横浜電鉄株式会社  
発行年…刊記なし、昭和三年（一  
九二八）十月十五日〜昭和四年  
（一九二九）十月二十一日

群内の他資料の年代と研究所建設期間を鑑みるとおよそ昭和四〜七年間（一九二九〜一九三二）と考えられる。

一方、資料用紙自体はもう少し発行年が下り、更に範囲が狭まる。沿線図より、昭和三年十月十五日の東横線横浜駅の開業後から、昭和四年十月二十二日の東横線九品仏駅↓自由ヶ丘駅への改称前の間。なお、この発行年間であると桜木町駅までは開通していないが、宣伝目的で前もって掲載しているのだろう。

塗りつぶし表現こそないものの、【資料2】形式——開通済の自社線路⇨赤線／未開通の自社線路⇨点線に主要駅の強調——と、【資料3】同様の対象地域——横浜駅以南を保土ヶ谷駅（沿線図中は「程ヶ谷」表記）、渋谷駅・目黒駅・大井町駅以北を楕円型の東京市半分（新宿駅↪東京駅）のみの記載——を色濃く反映した沿線図を使用している。

当研究所所蔵の資料群「見積書 東京横浜電鉄(株)他」の中の一点。十二行の縦書き用紙で、上部に沿線図、罫線欄外の右下に「東京横浜電鉄株式会社」と印字されている。資料の内容が書かれた正確な年月日は不明だが、

〔資料36〕 東京横浜電鉄宣伝チラシ（「東京 横浜 近道」）



所蔵：研究所（地域資料／寺田氏寄贈資料）

形状：一枚刷り、横53.6×縦25.4

発行：東京横浜電鉄株式会社

発行年：刊記なし、昭和三年（一九二八）十月十五日

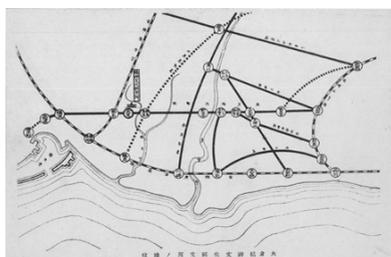
昭和四年（一九二九）十月三十一日

東横電鉄による宣伝チラシである。自社線路の魅力や強みをアピールする方法として、渋谷駅～横浜駅間を「距離（移動距離）」、「時間」（所要時間）、「賃金」（運賃）、「定期券」（購入料金）、「連絡」（乗り換え可能な鉄道種類）

の多さ）、「直通切符」（販売する直通切符の種類）の六項目で省線と比較し、より「近い」「早い」「安い」東横電鉄の利用を促す。名所の掲載等とは異なる点を全面に強調しており、少しでも利用客を獲得し増やすため努力している様子がうかがえる。<sup>22)</sup>

発行年は、昭和三年十月十五日の東横線横浜駅の開業後から、昭和四年十一月一日の大井町線自由ヶ丘駅～二子玉川駅間の開通前までの間。ただし、綱島温泉駅が綱島駅へ改称されるのは昭和十九年（一九四四）十月二十日であるにもかかわらず、「綱島駅」表記となっている。

〔資料37〕  
鎮礎式記念絵葉書



所蔵…研究所（沿革史資料一三五二—一〇二二）

形状…葉書、横140×縦90

発行…大倉精神文化研究所

所

発行年…刊記なし、昭和五年（一九三〇）四月九日

当研究所鎮礎式の際に作製・配布した、小冊子一冊と六枚組の絵葉書群（袋入り）のうちの一点。

渋谷駅・目黒駅・大井町駅以北は楕円型の東京市半分（新宿駅～東京駅）と新宿駅～登戸駅まで、神奈川方面は桜木町駅までを対象地域とした沿線図中には、実線・点線で結ばれた主要駅と唯一強調された太尾駅。そして、建設予定である研究所が「精神文化研究所」の文字と建物のイラストで主張され、葉書下部に「大倉精神文化研

究所ノ地位」とある。範囲が登戸駅まで含まれているの

は、当時登戸駅～綱島温泉駅～鶴見駅間を結ぶ大東京鉄道の建設が予定されており、東京方面から研究所へ赴く  
に使用される可能性の高い路線だった故と考えられる。

沿線図を基本形式に則りつつも、鎮礎式の参加者へ研究所の場所を分かりやすく説明したいという、研究所も  
とい大倉邦彦の想いが伝わる、オリジナリティあふれた  
資料である。

発行年は、小冊子表紙にもある通り、鎮礎式が挙行された年月日による。

【資料38】 金坂吉三葉書（「謹賀新年 昭和六年元旦」）



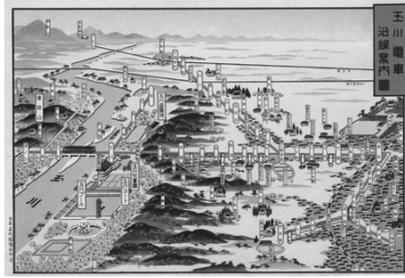
所 蔵…研究所（沿革史資料五〇八四四）  
形 状…葉書、横137×縦90  
発 行…金坂吉三、東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社  
発 行年…刊記なし、昭和六年（一九三一）

ており、当時の電鉄の住所とは異なるため、金坂個人の住所と推測される。個人使用の年賀葉書にも沿線図が掲載されていることから、社員も電鉄の事業力アピールに一役買っていたのだろうか。

大倉邦彦宛の年賀状。送付主の金坂吉三は、当研究所に名刺が残っている（沿革史資料一二二五二―二八九）ことから大倉邦彦と面識があったようだ。しかし、名刺には名前と「東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社」としか記載されておらず、金坂の社内での詳細な役職等は不明である。

葉書には、紙面の大部分を使用して沿線図が印刷されている。「金坂吉三 東京市外下荻窪二七九」と印字され

【資料39】 玉川電車沿線案内図



所蔵・研究所（沿革史資料

料一三四七〇—〇六）

形状：一枚刷り、横193×

縦130

発行：玉川電気鉄道株式

会社

発行年：刊記なし、昭和二

年（一九二七）七月十五

日、昭和七年（一九三二）

五月

日本名所図会社による鳥瞰図で現された沿線図。

当然ではあるが、図上に示されるのは玉川電鉄の管轄線路が中心となるため、多摩川を渡った東京側の地域が画面中央に据えられている。具体的な範囲は、北は渋谷駅・天現寺橋駅、南は多摩川を神奈川県側へ渡ってすぐに位置する溝ノ口駅まで。東は中目黒駅、西は下高井戸駅と、下高井戸駅で接続している京王線の終点八王子駅

までとなっている。描かれる地域こそ異なるものの、渋谷

駅・中目黒駅付近を別色で塗りつぶす表現が確認でき

る等先に紹介してきた沿線案内との共通点を見出すこと

ができる。また、沿線周辺の施設も、娯楽施設の玉川児

童園・玉川遊園地を中心に、開発を行っていた津田山、

学校設備の明大グラウンド等が散見。東横・目蒲電鉄と

同種の名所を抱え、アピールしていた。

発行年は、昭和二年七月十五日の玉川線支線である溝

ノ口線開通後から、昭和七年五月に東京ゴルフ倶楽部が

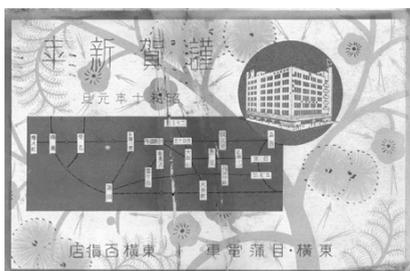
朝霞へ移転するまでの間。

【資料40】 東京横浜電鉄葉書（「謹賀新年 昭和八年元旦」）



所蔵・研究所（沿革史資料五五一七二）  
形状・葉書、横140×縦91  
発行・東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社運輸課  
発行年・刊記なし、昭和八年（一九三三）

【資料41】 五島慶太葉書（「謹賀新年 昭和十年元旦」）



所蔵・研究所（沿革史資料六二二六三）  
形状・葉書、横140×縦90  
発行・五島慶太、東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社  
発行年・刊記なし、昭和十年（一九三五）

大倉精神文化研究所宛の年賀状。この資料も紙面の半分を沿線図掲載に費やしている。ところどころペン書きにて施設の塗りつぶしが見られるが、残念ながら書き込みした人物やその意図は判別できない。

当時電鉄の主力事業であった東横食堂<sup>23</sup>に加え、前年に開設した電鉄関連施設（等々力ゴルフコース・駒沢ゴルフコース・太尾公園）が漏れなく名前を連ねており、直近の目玉事業だったことが明確である。

大倉邦彦宛の年賀状。薄桃色の植物模様が描かれた台紙に、濃紫色で囲われた沿線図と、緑の円でひとときわ目立った東横百貨店のイラスト。この年賀状が投函される直前の昭和九年（一九三四）十一月一日に開店した、電鉄渾身の事業である東横百貨店が早速反映されている。

〔資料4〕 綱島温泉浴場案内



所蔵…研究所（地域資料／寺田氏寄贈資料）

形状…リーフレット、見開き横265×縦189

発行…東京横浜電鉄株式会社

発行年…刊記なし、昭和八年（一九三三）七月十日（昭和十年（一九三五）十月三十一日）

綱島温泉浴場は、東横電鉄株式会社の直営で昭和二年（一九二七）四月に開業。以降、沿線行楽地の代表として必ずと言っていいほど名前が挙がる施設となった<sup>24</sup>。温泉自体は以前から湧き出ており、温泉街も既に形成されていたが、当施設を契機に更に広範囲へ広がっていくこととなる。

中を見ると、約四十畳の特別休憩室が三室、約三十畳の余興室、売店等、写真付きで紹介されている。部屋・施設の一つ一つが非常に大きく充実しており、まるでその有名ぶりを体現するかのようだ。

沿線図は東横・目蒲電鉄と池上電鉄の主要駅から綱島温泉駅へのアクセスが省略形で示され、描かれる対象地域も同時代に発行された沿線案内同様、原宿駅～品川駅までとしている。その左隣では入浴券付電車回数券の販売、下には電車賃及び所要時間がアナウンスされている。発行年は、昭和八年七月十日に池上線が目蒲電鉄の傘下に入った後（吸収合併は昭和九年十月一日）から、昭和十年十一月一日の池上線支線である新奥沢線廃止までの間。

【資料4】 観音霊場西国三十三札所京浜東横沿線出開扉



所蔵：研究所（沿革史資料一三五六六—〇五）

形状：リーフレット、見開を横270×縦194

発行：主催／西国札所東京出開扉奉賛会、後援／京浜電気鉄道株式会社、東京横浜電気株式会社

発行年：刊記なし、昭和十年（一九三五）十月十日～昭和十年（一九三五）十一月十一日

「非常時護国祈願並関東大震災物故者十三回忌追善供養」を目的に、京浜電鉄・東横電鉄沿線の寺院や施設十二カ所で行う西国三十三札所の出開扉を案内したもの。十二カ所への行き方や最寄り駅からの距離、また一日限り使用可能な「巡拝割引乗車券」と「納経帳（集印帳）」

を各駅で販売することが表紙右側に記載されている。

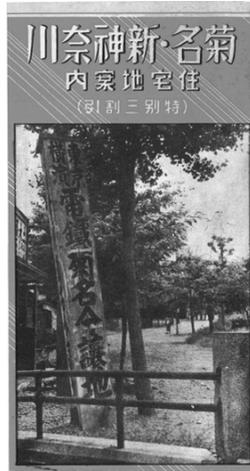
裏の沿線図では、十二カ所の最寄り駅（参拝下車駅）が赤丸で強調され、最寄り駅からの距離、出開扉を行っている西国三十三札所の具体的な寺院名が確認可能だ。

例えば、東横線日吉駅を見てみると、「金蔵寺（八丁）」、その横に「第十七番 六波羅蜜寺」「第十八番 六角堂」

「第十九番 草堂」とある。ほか、「品川駅特別室」「花園本館貴賓室」や東横線沿線にあたらぬ「九品仏淨真寺」も十二カ所中に選ばれているが、その選考基準は不明である。また、東横百貨店・京浜デパートが大きく描かれており、参拝客の来店を狙ったものと思われる。

発行年は、資料中の「非常時護国祈願並関東大震災物故者十三回忌追善供養」の文言に加え、開扉期間が「十月十日より十一月十一日まで」とあることによる。

【資料4】 菊名・新神奈川住宅地案内（特別三割引）



所蔵…研究所（地域資料／寺田氏寄贈資料）

形状…リーフレット、見開き横380×縦180

発行…東京横浜電鉄株式会社・目黒蒲田電鉄株式会社

田園都市課

発行年…刊記なし、昭和十一年（一九三六）四月一日

昭和十一年（一九三六）九月三十日

「東京横浜電鉄菊名分譲地」と書かれた案内板を写した写真のみで構成されたシンプルな表紙。

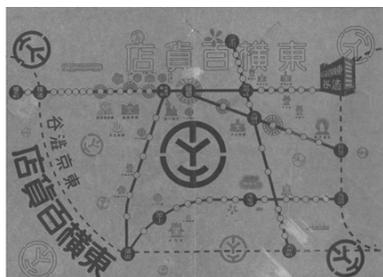
郊外分譲地の販売案内という当資料の特質故か、旧形式（【資料2】）の特徴の一つであった。都心部の塗りつぶし<sup>①</sup>が沿線図に施されている。渋谷駅・目黒駅・大井

町駅以北の東京市内（原宿駅～品川駅間）、大井町駅、大森駅、蒲田駅、川崎駅、鶴見駅、東神奈川駅、反町駅以南の地域だ。なお、記載対象地域は、中野駅～小金井駅、小机駅・保土ヶ谷駅と前掲資料より拡大していることを記しておく。

昭和二年（一九二七）の分譲開始<sup>②</sup>から約十年の歳月で、菊名地区は約六割、新神奈川地区は約九割が既に定価で売約済となっているのだから、まずまずの売れ行きだったと推察できる。また、購入後六ヶ月以内、または一年以内に住宅を建てて住んだ場合は無賃バス券が贈呈され、沿線の定住化を促進する狙いがあった。

発行年は、昭和十一年四月一日の東横線碑文谷駅↓青山師範駅改称後から、昭和十一年十月二十二日に玉川線が東横電鉄の傘下に入るまでの間（吸収合併は昭和十三年四月一日）。更に、売出要項中で特売期間が九月十七日～九月三十日と定められていることによる。

【資料45】 東横百貨店包装紙



所蔵…研究所（地域資料）

／寺田氏寄贈資料）

形状…一枚刷り、横 $210$

×縦 $110$

発行…東横百貨店

発行年…刊記なし、昭和九

年（一九三四）十一月一

日～昭和十一年（一九三

六）

東横百貨店は、渋谷に開店した東横電鉄直営の本格的なターミナルデパートである。駅ビルと一体化したデパートを鉄道会社が直営するという事業形態は、大阪の阪急デパートに続いて二番目、関東圏では初となった。<sup>26)</sup>沿線住民や鉄道乗降客をターゲットに、庶民的な雰囲気と廉価で豊富な品揃えを売りにした結果、東横電鉄の利益の主要部分を占めるようになっていく。

紙の中央をはじめ、そこかしこに散りばめられた東横

電鉄のマーク。その間を縫うように、簡略化した沿線図と名所が描かれたデザイン。東横百貨店での買い物客に限らず、その包装紙を見かけたほかの人々の目にも訴える巧みな宣伝方法だといえよう。

発行年は、昭和九年十一月一日の東横百貨店の開業後から、昭和十一年の原村梅園閉園までの間。

【資料46】 元住吉のいちぐく狩り



所蔵…研究所（地域資料

／寺田氏寄贈資料）

形状…一枚刷り、横598

×縦180

発行…東京横浜電鉄株式

会社運輸課、目黒蒲田電

鉄株式会社運輸課

発行年…刊記なし、昭和七

年（一九三二）三月三十

一日～昭和十四年（一九

三九）十月十五日

秋の行楽として代表的な無花果狩りの宣伝チラシ。

「元住吉無花果園」という名前、または元住吉と無花果

狩りを関連づけた形で沿線案内（資料18）【資料19】【資

料20】【資料21】【資料23】【資料24】【資料25】【資料31】

にも度々紹介されているが、残念ながら詳細は不明。

しかし、『清和』第一巻第三号（昭和九年（一九三四）

十月一日発行）には、東横電鉄が旅客誘致のため昭和七

年（一九三二）春に広島から苗を移植し無花果園を開園

した旨が記載されており、開園期間や入園料は当資料の

情報と一致するが、残念ながら栽培地が書かれておらず

決定打に欠ける。

無花果狩りを楽しむ女性たちの写真と、主要駅から元

住吉駅までの行き方のみを記した単純な沿線図がチラシ

下部に。案内文には、開園時期や電車賃、入園料といっ

た基本情報から、同園で無花果狩り以外にも葡萄狩り、

梨の特価購入が可能となっている旨が記されている。

発行年は、昭和七年三月三十一日の東横線桜木町駅の

開業後から、昭和十四年十月十六日の目蒲電鉄の社名変

更までの間。なお、電鉄は昭和十四年（一九三九）下半

期に元住吉無花果園の土地を分譲している。<sup>28)</sup>

【資料47】 網島温泉



所蔵：研究所（地域資料／寺田氏寄贈資料）

形状：リーフレット、見開き横26.1×縦13.5

発行：東京横浜電鉄株式会社、目黒蒲田電鉄株式会社、池上電鉄株式会社

発行年：刊記なし、昭和八年（一九三三）七月十日～昭和十四年（一九三九）十月十五日

【資料42】でも触れたが、網島温泉浴場の開業以前から樽町には温泉旅館が存在した。当資料ではそうした旅館——初期開業といわれる永命館や琵琶園<sup>20</sup>、網島温泉街を代表する旅館である水明楼や梅島館<sup>20</sup>等も含め、網島温泉全体を案内するリーフレットとなっている。「特筆す

べきことは都心より僅か半時間位にて到達出来、然も簡易に温泉気分にひたることの出来るといふ便宜な点」だと明記されているように、都心から日帰り、且つ安価で温泉が楽しめるのを最大の売りとした。

沿線図は【資料42】よりも更に省略され、最低限の情報のみとなっている。網島温泉駅は勿論のこと、網島温泉の定番の「附近名所」として太尾公園・大倉精神文化研究所が紹介された繋がりで、隣の大倉山駅が特に大きく強調されている。

発行年は、昭和八年七月十日に池上線が目蒲電鉄の傘下に入った後（吸収合併は昭和九年十月一日）から、昭和十四年十月十六日の目蒲電鉄の社名変更までの間。

## 注

- (1) 佐藤達一朗「大正広重」と呼ばれた男―吉田初三郎の鳥瞰図とその背景―(『日本古書通信』第六十四卷第七号(通巻八百四十号)、一〇一―一、日本古書通信社、一九九九年)、小川功「私鉄「沿線案内」変遷史(2)」(『鉄道ジャーナル』Vol.17 No.9、二八―三一、株式会社鉄道ジャーナル社、一九八三年)。
- (2) 「乗合自動車(バス、タクシー)事業の始まり」(『東急一〇〇年史』(WEB版)「1-3-1-1」[https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01\\_3\\_1/](https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01_3_1/)、二〇一二年十二月十三日最終閲覧)。
- (3) 松本和明「娯楽・百貨店事業と渋谷の開発」(奥須磨子・羽田博昭編『首都圏史叢書5 都市と娯楽：開港期～1930年代』、五九―八六、二〇〇四年)。
- (4) 奥須磨子「郊外の再発見―散歩・散策から行楽へ―」(奥須磨子・羽田博昭編『首都圏史叢書5 都市と娯楽：開港期～1930年代』、一九三―二一五、二〇〇四年)。
- (5) 「池上電気鉄道の歴史」(『東急一〇〇年史』(WEB版)「1-2-3-1」[https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01\\_2\\_3/](https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01_2_3/)、二〇一二年十二月十三日最終閲覧)。
- (6) 東京急行電鉄株式会社社史編纂事務局編『東京急行電鉄50年史』、八九三頁、東京急行電鉄株式会社社史編纂委員会、一九七三年四月十八日。
- (7) 『清和』第四巻第五号、七二頁、東京横浜電鉄株式会社目黒蒲田電鉄株式会社清和倶楽部、一九三七年五月十日。
- (8) 平井誠二「第四三回 天然氷で村おこし」(『わがまち港北』出版グループ編『わがまち港北』、九七―一〇〇、二〇〇九年七月)、平井誠二「第八五回 氷場からスケートリンクへ」(『わがまち港北』出版グループ編『わがまち港北』、一九二―一九四、二〇〇九年)。
- (9) 平井誠二・林宏美「第二〇五回 樽町地区―地域の成り立ち、その九―」(『わがまち港北』出版グループ編『わがまち港北3』、一〇四―一〇七、二〇二〇年)、平井誠二・林宏美「第三一回 樽は綱島―不思議な菖蒲園―」(『わがまち港北』出版グループ編『わがまち港北3』、二五―二五三、二〇二〇年)。

- (10) 『清和』第八卷第六号、六九頁、東京横浜電鉄株式会社目黒蒲田電鉄株式会社清和倶楽部、一九四一年六月三十日。
- (11) 『玉川電気鉄道の歴史』〔「東急一〇〇年史 (WEB版)」1—2—3—2、[https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01\\_2\\_3/](https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01_2_3/)、二〇二二年十二月十三日最終閲覧〕。
- (12) 「東京高等工業学校、慶應義塾大学予科などの学校誘致」〔「東急一〇〇年史 (WEB版)」1—3—1—3、[https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01\\_3\\_1/](https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01_3_1/)、二〇二二年十二月十三日最終閲覧〕。
- (13) 句点は引用者による。
- (14) 『清和』第四卷第十号、五〇—五一頁、東京横浜電鉄株式会社目黒蒲田電鉄株式会社清和倶楽部、一九三七年十月十日。
- (15) 『清和』第八卷第八号、七四—七五頁、東京横浜電鉄株式会社目黒蒲田電鉄株式会社清和倶楽部、一九四一年八月二十三日。
- (16) 「京浜電気鉄道・小田急電鉄を合併、東京急行電鉄の誕生」〔「東急一〇〇年史 (WEB版)」1—4—1—3、[https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01\\_4\\_1/](https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01_4_1/)、二〇二二年十二月十三日最終閲覧〕。
- (17) 「京浜電気鉄道・小田急電鉄を合併、東京急行電鉄の誕生」〔「東急一〇〇年史 (WEB版)」1—4—1—3、[https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01\\_4\\_1/](https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01_4_1/)、二〇二二年十二月十三日最終閲覧〕、「京王電気軌道を合併、「大東急」へ」〔「東急一〇〇年史 (WEB版)」1—4—1—4、[https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01\\_4\\_1/](https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01_4_1/)、二〇二二年十二月十三日最終閲覧〕。
- (18) 東横社リーフレット、東京急行電鉄株式会社、二〇一八年。
- (19) 『清和』第七卷第四号、三一—六頁、東京横浜電鉄株式会社目黒蒲田電鉄株式会社清和倶楽部、一九四〇年四月十日。
- (20) 平井誠二「第一五回 日月桃の昨日今日—綱島の桃—」〔「わがまち港北」出版グループ編『わがまち港北』、四一—四二、二〇〇九年〕、平井誠二「第三〇回 綱島の桃ふたたび—日月桃の今日明日—」〔「わがまち港北」出版グループ編『わがまち港北』、六九—七一、二〇〇九年〕。
- (21) 「創業初期の目黒蒲田電鉄および東京横浜電鉄の経営状況」〔「東急一〇〇年史 (WEB版)」1—2—2—6、[https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01\\_2\\_2/](https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01_2_2/)、二〇二二年十二月十三日最終閲覧〕、「港北区郷土史編さん刊行委員会編『港北区史』(港北区郷土史編さん刊行委員会、一九八六年)。

- (22) 「創業初期の目黒蒲田電鉄および東京横浜電鉄の経営状況」〔東急一〇〇年史 (WEB版)〕1—2—2—6、[https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01\\_2\\_2/](https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01_2_2/)、二〇二二年十二月十三日最終閲覧)。
- (23) 「創業初期の目黒蒲田電鉄および東京横浜電鉄の経営状況」〔東急一〇〇年史 (WEB版)〕1—2—2—6、[https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01\\_2\\_2/](https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01_2_2/)、二〇二二年十二月十三日最終閲覧)。
- (24) 「レジャー施設の開業など付帯事業」〔東急一〇〇年史 (WEB版)〕1—3—1—5、[https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01\\_3\\_1/](https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01_3_1/)、二〇二二年十二月十三日最終閲覧)。
- (25) 港北区郷土史編さん刊行委員会編『港北区史』、港北区郷土史編さん刊行委員会、一九八六年。
- (26) 「ターミナルレポート・東横百貨店の開店」〔東急一〇〇年史 (WEB版)〕1—3—1—2、[https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01\\_3\\_1/](https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01_3_1/)、二〇二二年十二月十三日最終閲覧)、松本和明「娯楽・百貨店事業と渋谷の開発」〔奥須磨子・羽田博昭編『首都圏史叢書5 都市と娯楽・開港期〜1890年代』、五九—八六、二〇〇四年)。
- (27) 『清和』第一巻第三号、二二—二二頁、東京横浜電鉄株式会社目黒蒲田電鉄株式会社清和倶楽部、一九三四年十月一日。
- (28) 「田園都市事業の進捗と目黒蒲田電鉄による吸収合併」〔東急一〇〇年史 (WEB版)〕1—2—2—5、[https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01\\_2\\_2/](https://www.tokyu.co.jp/history/chapter01_2_2/)、二〇二二年十二月十三日最終閲覧)。
- (29) 平井誠二「第六二回 綱島温泉の記録—その一—」〔わがまち港北』出版グループ編『わがまち港北』、一四一—一四三、二〇〇九年)。
- (30) 吉田律人「港北地域学講座二〇二一年度第四回「東京大空襲と綱島温泉」」〔港北区役所・わがまち港北映像プロジェクト制作「港北地域学講座」、<https://www.youtube.com/watch?v=yGfKMVTTZk8>、二〇二二年十二月十二日最終閲覧)。

推定理由	情報掲載面記載項目（右から順）	所蔵先
<p>吉田初三郎識の「絵に添えて一筆」の日付による。</p> <p>※丸子多摩川駅～神奈川駅間は開通していないが、完成間近のため赤い太線で掲載カ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 絵に添えて一筆</li> <li>・ 沿線名所旧跡（名称／最近駅名／方位及距離／記事）</li> <li>・ 沿線ノ主ナル旅客関係年中行事（月日／行事／関係駅）</li> <li>・ 写真（「大岡山駅附近洗足池の景」、「多摩川遊園地大浴場」、「丸子多摩川駅より多摩の清流を望む」）</li> </ul>	寺田氏寄贈資料
<p>（自）大正15年2月14日の東横線丸子多摩川駅～神奈川駅間開通後。</p> <p>（至）昭和2年3月10日の東横線東白楽駅開業前。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 旅客運賃表（目黒駅～丸子多摩川駅、新丸子駅～神奈川駅、沼部駅～蒲田駅）</li> <li>・ 定期乗車券</li> <li>・ 回数乗車券</li> <li>・ 団体割引（運動会会場無料提供）</li> <li>・ 多摩川園遊覧乗車券</li> <li>・ 沿線名所旧跡（名称／最近駅名／方位及距離／記事）</li> <li>・ 沿線の主なる旅客関係年中行事（月日／行事／関係駅）</li> </ul>	神奈川県立図書館 （資料コード： 60453156）
<p>（自）昭和2年8月28日の東横線渋谷駅～丸子多摩川駅間開通後。</p> <p>（至）昭和3年5月18日の東横線高島駅開業前。</p> <p>※表紙を鑑みて昭和2年秋カ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 旅客運賃表（渋谷駅～神奈川駅、目黒駅～大井町駅）</li> <li>・ 定期乗車券</li> <li>・ 回数乗車券</li> <li>・ 団体割引</li> <li>・ 多摩川園遊覧乗車券</li> <li>・ 沿線名所旧跡（名称／最近駅名／方位及距離／記事）</li> </ul>	横浜開港資料館 蔵椎橋忠男家文書513-2
<p>（自）昭和3年10月15日の東横線横浜駅開業後。</p> <p>（至）昭和4年10月22日の東横線九品仏駅→自由ヶ丘駅への改称前。</p> <p>※大岡山駅～二子玉川駅間は開通していないが、宣伝のために赤線で掲載カ（運賃表は大井町駅～大岡山駅までのみ）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 旅客運賃表（渋谷駅～本横浜駅、目黒駅～大井町駅）</li> <li>・ 定期乗車券</li> <li>・ 回数乗車券</li> <li>・ 団体割引</li> <li>・ 多摩川園遊覧乗車券</li> <li>・ 写真（「九品仏」、「碑文谷駅附近」、「洗足池」、「新田神社」、「調布田園都市」二枚、「温泉遊園地多摩川園」、「多摩川園温泉浴場」、「丸子多摩川水泳場」、「横浜市内高架線」、「電鉄直営綱島ラヂウム温泉」、「綱島ラヂウム温泉浴場」）</li> </ul> <p>※沿線名所旧跡は表へ移動</p>	寺田氏寄贈資料
<p>（自）昭和3年10月15日の東横線横浜駅開業後。</p> <p>（至）昭和4年10月22日の東横線九品仏駅→自由ヶ丘駅への改称前。</p> <p>※大岡山駅～二子玉川駅間は開通していないが、宣伝のために赤線で掲載カ（運賃表は大井町駅～大岡山駅までのみ）</p>		沿革史資料 12296-23

【資料一覧表】

資料番号	資料画像	資料名	発行者 (記載住所)	刊記の有無・ 推定発行時期
1		目黒蒲田電鉄 東京横浜電鉄 沿線名所案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 (東京市外大崎町大字上大崎二三九)	刊記なし 大正15年(1926)新春
2		目黒・神奈川・丸子多摩川・蒲田間電車案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 (東京市外大崎町上大字上大崎二三九番地)	刊記なし 大正15年(1926)2月14日～ 昭和2年(1927)3月9日
3		沿線案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 (東京市外大崎町上大崎二三九番地)	刊記なし 昭和2年(1927)秋
4		東京横浜電鉄 目黒蒲田電鉄 沿線案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 (東京市外大崎町上大崎)	刊記なし 昭和3年(1928)10月15日～ 昭和4年(1929)10月21日
5		東京横浜・目黒蒲田電車沿線案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社	刊記なし 昭和3年(1928)10月15日～ 昭和4年(1929)10月21日

推定理由	情報掲載面記載項目（右から順）	所蔵先
<p>(自) 昭和3年10月15日の東横線横浜駅開業後。 (至) 昭和4年10月22日の東横線九品仏駅→自由ヶ丘駅への改称前。</p> <p>※大岡山駅～二子玉川駅間は開通していないが、宣伝のために赤線で掲載カ（運賃表は大井町駅～大岡山駅までのみ）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 旅客運賃表（渋谷駅～本横浜駅、目黒駅～大井町駅）</li> <li>・ 定期乗車券</li> <li>・ 回数乗車券</li> <li>・ 団体割引</li> <li>・ 多摩川園遊覧乗車券</li> <li>・ 沿線名所旧跡（名称／最近駅名／方位及距離／記事）</li> <li>・ 写真（「電鉄直営綱島ラヂユーム大浴場」、「温泉遊園地多摩川園」）</li> </ul>	沿革史資料 12296-24
<p>(自) 昭和3年10月15日の東横線横浜駅開業後。 (至) 昭和4年10月22日の東横線九品仏駅→自由ヶ丘駅への改称前。</p> <p>※大岡山駅～二子玉川駅間は開通していないが、宣伝のために赤線で掲載カ（運賃表は大井町駅～大岡山駅までのみ）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 旅客運賃表（渋谷駅～本横浜駅、目黒駅～大井町駅）</li> <li>・ 定期乗車券</li> <li>・ 回数乗車券</li> <li>・ 団体割引</li> <li>・ 多摩川園遊覧乗車券</li> <li>・ 沿線名所旧跡（名称／最近駅名／方位及距離／記事）</li> <li>・ 写真（「電鉄直営綱島ラヂユーム大浴場」、「温泉遊園地多摩川園」）</li> </ul>	国際日本文化研究センター (資料ID: 003146792)
刊記による。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 旅客運賃表（渋谷駅～本横浜駅、目黒駅～二子玉川駅）</li> <li>・ 定期乗車券</li> <li>・ 回数乗車券</li> <li>・ 団体割引</li> <li>・ 多摩川園遊覧乗車券</li> <li>・ 沿線名所旧跡（名称／最近駅名／方位及距離／記事）</li> <li>・ 写真（「電鉄直営綱島ラヂユーム大浴場」、「温泉遊園地多摩川園」）</li> </ul>	沿革史資料 12645-22
刊記による。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 旅客賃金表（渋谷駅～本横浜駅、目黒駅～二子玉川駅）</li> <li>・ 定期乗車券</li> <li>・ 回数乗車券</li> <li>・ 団体割引</li> <li>・ 多摩川園遊覧乗車券</li> <li>・ 沿線名所旧跡（名称／最近駅名／方位及距離／記事）</li> <li>・ 写真（「電鉄直営綱島ラヂユーム大浴場」、「温泉遊園地多摩川園」）</li> </ul>	寺田氏寄贈資料
刊記による。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 旅客賃金表（渋谷駅～本横浜駅、目黒駅～二子玉川駅）</li> <li>・ 連絡切符発売</li> <li>・ 回数乗車券</li> <li>・ 団体割引</li> <li>・ 定期乗車券</li> <li>・ 多摩川園遊覧乗車券</li> <li>・ 温泉遊園地 多摩川園入園御案内（普通入園料、一般団体割引率、学生生徒団体割引率）</li> <li>・ 沿線の名所・旧跡・行事（名称／最寄駅名／方位及距離／略記）</li> <li>・ 写真（「電鉄直営綱島ラヂユーム大浴場」、「温泉遊園地多摩川園」）</li> </ul>	沿革史資料 1350・1351・ 6672・10752

資料番号	資料画像	資料名	発行者 (記載住所)	刊記の有無・ 推定発行時期
6		東京横浜電鉄 目黒蒲田電鉄 沿線案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 (東京市外大崎町上大崎)	刊記なし 昭和3年(1928)10月15日 ～ 昭和4年(1929)10月21日
7		東京横浜電鉄 目黒蒲田電鉄 沿線案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 (東京市外大崎町上大崎)	刊記なし 昭和3年(1928)10月15日 ～ 昭和4年(1929)10月21日
8		沿線案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 (東京市外大崎町上大崎)	刊記あり 昭和4年(1929)12月
9		沿線案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 (東京市外大崎町上大崎)	刊記あり 昭和5年(1930)5月
10		沿線案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 (東京市外大崎町上大崎)	刊記あり 昭和5年(1930)10月

推定理由	情報掲載面記載項目（右から順）	所蔵先
<p>（自）昭和6年1月20日の東横線高島町駅開業後。</p> <p>（至）昭和6年7月25日の東横線柿ノ木坂駅→府立高等前駅への改称前。</p> <p>※日本医科大学予科は移転完了していないが、宣伝のために掲載カ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 旅客賃金表（渋谷駅～高島町駅、目黒駅～二子玉川駅）</li> <li>・ 連絡切符発売</li> <li>・ 回数乗車券</li> <li>・ 団体割引</li> <li>・ 定期乗車券</li> <li>・ 多摩川園遊覧乗車券</li> <li>・ 温泉遊園地 多摩川園入園御案内（普通入園料、一般団体割引率、学生生徒団体割引率）</li> <li>・ 沿線の名所・旧跡・行事（名称／最寄駅名／方位及距離／略記）</li> <li>・ 写真（「電鉄直営綱島ラヂウム大浴場」、「温泉遊園地多摩川園」）</li> </ul>	<p>国際日本文化研究センター （資料ID： 003146792）</p>
<p>（自）昭和7年3月31日の東横線桜木町駅開業後。</p> <p>（至）昭和7年10月1日の大崎町が東京市品川区へ編入される前。</p> <p>※表紙を鑑みて昭和7年春カ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 旅客賃金表（渋谷駅～桜木町駅、目黒駅～二子玉川駅）</li> <li>・ 連絡切符発売</li> <li>・ 回数乗車券</li> <li>・ 団体割引</li> <li>・ 定期乗車券</li> <li>・ 多摩川園遊覧乗車券</li> <li>・ 温泉遊園地 多摩川園入園御案内（普通入園料、一般団体割引率、学生生徒団体割引率）</li> <li>・ 沿線の名所・旧跡・行事（名称／最寄駅名／方位及距離／略記）</li> </ul>	<p>木下富照氏</p>
<p>（自）昭和7年3月31日の東横線桜木町駅開業後。</p> <p>（至）昭和7年10月1日の大崎町が東京市品川区へ編入される前。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 電車団体割引</li> <li>・ 多摩川園遊覧乗車券</li> <li>・ 温泉遊園地 多摩川園入園御案内（一般団体割引率、学生生徒団体割引率）</li> <li>・ ピクニックコースと其の費用（五コース）</li> <li>・ 東京湾汽船連絡と房総廻り（団体に限り）</li> <li>・ 湘南電車には東横線経由で（遠し切符発売横浜乗換）</li> </ul>	<p>寺田氏寄贈資料</p>
<p>（自）昭和7年10月1日の大崎町が東京市品川区へ編入された後。</p> <p>（至）昭和8年4月1日の大井町線中丸山駅→緑ヶ丘駅への改称前。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 旅客賃金表（渋谷駅～桜木町駅、目黒駅～二子玉川駅）</li> <li>・ 連絡切符発売</li> <li>・ 団体旅客割引</li> <li>・ 多摩川園遊覧乗車券</li> <li>・ 季節遊覧案内</li> <li>・ 沿線のスポーツ場（種類／名称／最寄駅名）</li> <li>・ 沿線の娯楽施設（名称／最寄駅名）</li> <li>・ 会社経営分譲地（田園調布、奥沢、等々力、上野毛、新丸子、日吉、綱島温泉、菊名（以上分譲地）、尾山台（貸地））</li> <li>・ 沿線の名所旧跡（名称／最寄駅名／略記）</li> </ul>	<p>寺田氏寄贈資料</p>

資料番号	資料画像	資料名	発行者 (記載住所)	刊記の有無・ 推定発行時期
11		沿線案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 (東京市外大崎町上大崎)	刊記なし 昭和6年(1931) 1月20日 ～ 昭和6年(1931) 7月24日
12		沿線案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 (東京市外大崎町上大崎二三九)	刊記なし 昭和7年(1932) 春 (3月31日～)
13		南郊のピクニック	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 (東京市外大崎町上大崎二三九)	刊記なし 昭和7年(1932) 3月31日 ～ 昭和7年(1932) 9月30日
14		沿線案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 (東京市品川区上大崎四丁目二三九)	刊記なし 昭和7年(1932) 10月1日 ～ 昭和8年(1933) 3月31日

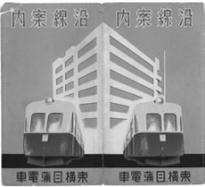
推定理由	情報掲載面記載項目（右から順）	所蔵先
<p>(自) 昭和8年4月1日の大井町線中丸山駅→緑ヶ丘駅への改称後。 (至) 昭和8年6月1日の池上線御嶽山前駅→御嶽山駅への改称前。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 東横目蒲賃金表 (渋谷駅～桜木町駅、目黒駅～二子玉川駅)</li> <li>・ 池上賃金表 (五反田駅～蒲田駅、諏訪分駅・新奥沢駅)</li> <li>・ 多摩川園遊覧乗車券</li> <li>・ 東横目蒲団体割引</li> <li>・ 池上団体割引</li> <li>・ 季節遊覧案内</li> <li>・ 沿線のスポーツ場 (種類/名称/最寄駅名)</li> <li>・ 沿線の娯楽施設 (名称/最寄駅名)</li> <li>・ 会社経営分譲地 (田園調布、奥沢、等々力、上野毛、新丸子、日吉、綱島温泉、菊名 (以上分譲地)、尾山台 (貸地))</li> <li>・ 沿線の名所旧跡 (名称/最寄駅名)</li> </ul>	寺田氏寄贈資料
<p>(自) 昭和8年4月1日の大井町線中丸山駅→緑ヶ丘駅への改称後。 (至) 昭和8年7月10日に池上電鉄が目蒲電鉄の傘下に入る前。(吸収合併は昭和9年10月1日)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 旅客賃金表 (渋谷駅～桜木町駅、目黒駅～二子玉川駅)</li> <li>・ 連絡切符発売</li> <li>・ 団体旅客割引</li> <li>・ 多摩川園遊覧乗車券</li> <li>・ 季節遊覧案内</li> <li>・ 沿線のスポーツ場 (種類/名称/最寄駅名)</li> <li>・ 沿線の娯楽施設 (名称/最寄駅名)</li> <li>・ 会社経営分譲地 (田園調布、奥沢、等々力、上野毛、新丸子、日吉、綱島温泉、菊名 (以上分譲地)、尾山台 (貸地))</li> <li>・ 沿線の名所旧跡 (名称/最寄駅名/略記)</li> </ul>	個人蔵
<p>(自) 昭和8年4月1日の大井町線中丸山駅→緑ヶ丘駅への改称後。 (至) 昭和8年7月10日に池上電鉄が目蒲電鉄の傘下に入る前。(吸収合併は昭和9年10月1日)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>(・ 沿線名所十九箇所の説明)</li> <li>・ 写真 (「九品仏」、「駒沢ゴルフコース」、「東横食堂」、「多摩川園」、「多摩川水泳場」、「多摩川べり」、「多摩川オリムピア」、「綱島温泉」、「綱島温泉の桃と桜」)</li> </ul>	寺田氏寄贈資料
<p>(自) 昭和8年7月10日に池上電鉄が目蒲電鉄の傘下に入った後。(吸収合併は昭和9年10月1日) (至) 昭和10年11月1日の池上線支線である新奥沢線廃止前。</p> <p>※大倉山スケートリンクの紹介があることから、リニューアルオープン周辺の昭和10年カ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 東横目蒲賃金表 (渋谷駅～桜木町駅、目黒駅～二子玉川駅)</li> <li>・ 池上賃金表 (五反田駅～蒲田駅、諏訪分駅・新奥沢駅)</li> <li>・ 多摩川園遊覧乗車券</li> <li>・ 団体割引</li> <li>・ 季節遊覧案内</li> <li>・ 沿線のスポーツ場 (種類/名称/最寄駅名)</li> <li>・ 沿線の娯楽施設 (名称/最寄駅名)</li> <li>・ 会社経営分譲地 (田園調布、奥沢、等々力、上野毛、新丸子、日吉、綱島温泉、菊名 (以上分譲地)、尾山台 (貸地))</li> <li>・ 沿線の名所旧跡 (名称/最寄駅名)</li> </ul>	寺田氏寄贈資料

資料番号	資料画像	資料名	発行者 (記載住所)	刊記の有無・ 推定発行時期
15		沿線案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 池上電鉄株式会社 (東京市品川区上大崎四丁目二三九)	刊記なし 昭和8年(1933)4月1日 ～ 昭和8年(1933)5月31日
16		沿線案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 (東京市品川区上大崎四丁目二三九)	刊記なし 昭和8年(1933)4月1日 ～ 昭和8年(1933)7月9日
17		遊覧案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 池上電鉄株式会社	刊記なし 昭和8年(1933)4月1日 ～ 昭和8年(1933)7月9日
18		沿線案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 (東京市品川区上大崎四丁目二三九)	刊記なし 昭和10年(1935)秋 (～10月31日)

推定理由	情報掲載面記載項目（右から順）	所蔵先
<p>(自) 昭和10年11月1日の池上線支線である新奥沢線廃止後。  (至) 昭和11年1月1日の目蒲線本門寺道駅→道塚駅への改称前。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 東横目蒲旅客運賃表（渋谷駅～桜木町駅、目黒駅～蒲田駅、大井町駅～二子玉川駅、五反田駅～蒲田駅）</li> <li>・ 多摩川園遊覧乗車券</li> <li>・ 団体割引</li> <li>・ 季節遊覧案内</li> <li>・ 沿線のスポーツ場（種類／名称／最寄駅名）</li> <li>・ 沿線の娯楽施設（名称／最寄駅名）</li> <li>・ 会社経営分譲地（田園調布、奥沢、等々力、大岡山、諏訪分、上野毛、新丸子、元住吉、日吉、綱島温泉、菊名（以上分譲地）、尾山台、久ヶ原、鷺ノ木、雪ヶ谷（以上貸地））</li> <li>・ 沿線の名所旧跡（名称／最寄駅名）</li> </ul>	寺田氏寄贈資料
<p>(自) 昭和11年4月1日の東横線碑文谷駅→青山師範駅への改称後。  (至) 昭和11年10月22日に玉川電鉄が東横電鉄の傘下に入る前（吸収合併は昭和13年4月1日）。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 沿線四季の行楽</li> <li>・ 写真（「太尾公園の梅」、「多摩川畔のピクニック」、「鶴見川堤の桜」、「多摩川園の桜」、「綱島温泉の桃」、「綱島菖蒲園」、「日吉台の苺摘み」、「洗足池のボート」、「丸子多摩川の大火」、「丸子多摩川のボート」、「多摩川園の夜景」、「下丸子水泳場」、「元住吉の無花果狩り」、「多摩川園の菊人形」二枚、「日吉台のいも堀り」、「大倉山スケート場」）</li> <li>・ 沿線の名所（名称／最寄駅）</li> <li>・ 沿線のスポーツ（種類／名称／最寄駅）</li> <li>・ 会社経営分譲地貸地（分譲地：田園調布、洗足、奥沢、等々力、大岡山、池上、日吉台、元住吉、新丸子、綱島、菊名／分譲契約要旨／賦金表／貸地：尾山台、雪ヶ谷、鷺ノ木、久ヶ原／住宅資金低利貸付／賦金表）</li> <li>・ 東横目蒲主要駅間旅客運賃表（渋谷駅～桜木町駅、目黒駅～蒲田駅、大井町駅～二子玉川駅、五反田駅～池上駅）</li> <li>・ 多摩川園遊覧乗車券</li> <li>・ 団体割引</li> <li>・ 写真（「コトモの楽園 多摩川園」四枚、「駒沢ゴルフコース」、「等々力ゴルフコース」、「多摩川オリムピア」、「オリムピア・クラブハウス」、「電鉄直営 東横百貨店」、「綱島温泉全景／電鉄直営浴場」、「水の公園 洗足池」）</li> </ul>	沿革史資料 12724-07
<p>(自) 昭和11年4月1日の東横線碑文谷駅→青山師範駅への改称後。  (至) 昭和11年10月22日に玉川電鉄が東横電鉄の傘下に入る前（吸収合併は昭和13年4月1日）。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 沿線の名所（名称／最寄駅）</li> <li>・ 沿線のスポーツ（種類／名称／最寄駅）</li> <li>・ 東横目蒲主要駅間旅客運賃表（渋谷駅～桜木町駅、目黒駅～蒲田駅、大井町駅～二子玉川駅、五反田駅～池上駅）</li> <li>・ 団体割引</li> <li>・ 写真（「多摩川園」、「多摩川園の納涼大会」、「多摩川園の菊人形」、「綱島温泉直営浴場」、「駒沢ゴルフコース」、「多摩川スピードウェイ」、「多摩川オリムピア」、「洗足池のボート遊び」、「多摩川べりのピクニック」、「丸子多摩川大火」）</li> </ul>	寺田氏寄贈資料

資料番号	資料画像	資料名	発行者 (記載住所)	刊記の有無・ 推定発行時期
19		東横・目蒲電車 沿線案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 (東京市品川区上大崎四丁目二三九)	刊記なし 昭和10年 (1935) 11月1日 ～ 昭和10年 (1935) 12月31日
20		沿線案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 (東京市品川区上大崎四丁目二三九番地)	刊記なし 昭和11年 (1936) 4月1日 ～ 昭和11年 (1936) 10月21日
21		沿線案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 (東京市品川区上大崎四丁目二三九番地)	刊記なし 昭和11年 (1936) 4月1日 ～ 昭和11年 (1936) 10月21日

推定理由	情報掲載面記載項目（右から順）	所蔵先
<p>(自) 昭和12年 2月26日の東横・目蒲電鉄事務所移転後。</p> <p>(至) 昭和12年 7月27日の玉川線と玉川線支線である天現寺橋線の軌道分離前。</p> <p>※表題や「つつじ人形」呼物期間（～5月31日）を鑑みて昭和12年春か</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・沿線のハイキング（五コース）</li> <li>・沿線春の行楽</li> <li>・写真（「多摩川園の空中遊覧」、「多摩川園の一部」、「玉川遊園地の桜」、「多摩川園のお花見風景」、「春の二子玉川原」、「玉川児童園の猿ヶ島」、「鶴見川堤の桃と桜」、「太尾公園」、「ハイキング「三つ池へ」、「三つ池」、「市ヶ尾古墳」、「春の洗足池」）</li> </ul>	寺田氏寄贈資料
<p>刊記による。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・沿線名所案内</li> <li>・沿線四季の行楽</li> <li>・沿線スポーツ案内（種類／名称／最寄駅）</li> <li>・沿線土地案内（分譲地：田園調布、洗足、奥沢、等々力、大岡山、洗足池南台、日吉台、元住吉、新丸子、池上、目黒区役所前、目黒三田台、豪徳寺駅前／貸地：尾山台、雪ヶ谷、鶴ノ木、久ヶ原）</li> <li>・東横目蒲主要駅間旅客運賃表（渋谷駅～桜木町駅、目黒駅～蒲田駅、大井町駅～二子玉川駅、五反田駅～蒲田駅）</li> <li>・玉川線旅客運賃表（下高井戸駅～天現寺橋駅）</li> <li>・玉川団体割引</li> <li>・東京・目蒲団体割引</li> <li>・玉電・市電連絡運賃</li> <li>・写真（「駒沢ゴルフコース」、「多摩川オリムピア」、「多摩川園」、「多摩川べり」、「綱島温泉」、「下丸子「川の家」」、「玉川プール」、「夏の丸子多摩川」、「洗足池」、「丸子多摩川の大火火」、「元住吉のいちぢく狩り」、「綱島の栗拾い」、「三つ池」、「多摩川園の菊人形」）</li> </ul>	沿革史資料 12645-21
<p>(自) 昭和12年 7月27日に玉川線と玉川線支線である天現寺橋線の軌道分離後。</p> <p>(至) 昭和13年11月19日の玉川線支線である天現寺橋線・中目黒線の東京市電気局への委託前。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・沿線四季の行楽</li> <li>・社営分譲地案内（大岡山、多摩川台、等々力、上野毛、池上、新丸子、日吉台、菊名、白楽、白楽北、宿山、守山公園、鶴屋町、豪徳寺、三田台、片瀬）</li> <li>・沿線名所案内</li> <li>・沿線スポーツ案内</li> <li>・沿線主要学校案内</li> <li>・東横・目蒲線旅客運賃表（渋谷駅～桜木町駅、目黒駅～蒲田駅、大井町駅～二子玉川駅、五反田駅～蒲田駅）</li> <li>・玉川線旅客運賃表（下高井戸駅～天現寺橋駅）</li> <li>・東京・目蒲線団体割引</li> <li>・玉川線団体割引</li> <li>・玉川線・市電連絡運賃</li> <li>・写真（「多摩川園」、「綱島温泉」の桃と桜、「幽邃の処女地「三つ池」、「洗足池」のボート遊び、「二子玉川「玉川児童園」、「多摩川べり」のピクニック」、「玉川プール」、「日吉台」のいちご摘み、「丸子多摩川」の大火火、「多摩川園」の菊人形、「多摩川オリムピア」、「駒沢ゴルフコース」）</li> </ul>	沿革史資料 12645-23

資料番号	資料画像	資料名	発行者 (記載住所)	刊記の有無・ 推定発行時期
22		春の御案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 (東京市渋谷区大和田町一番地)	刊記なし 昭和12年(1937)春 (～5月31日)
23		沿線案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 玉川電鉄株式会社 (渋谷区大和田町一番地)	刊記あり 昭和12年(1937)7月
24		沿線案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 (渋谷区大和田町一番地)	刊記なし 昭和12年(1937)7月27日 ～ 昭和13年(1938)11月18日

推定理由	情報掲載面記載項目（右から順）	所蔵先
<p>（自）昭和11年10月22日に玉川電鉄が東横電鉄の傘下に入った後（吸収合併は昭和13年4月1日）。</p> <p>（至）昭和14年3月10日の玉川児童園（玉川第二遊園地）→読売遊園への改称前。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ピクニック（三コース）</li> <li>・ハイキング（三コース）</li> <li>・日吉の芋掘り</li> <li>・網島の栗拾い</li> <li>・元住吉のいちさく狩り</li> <li>・写真（「日吉のいもほり」二枚、「網島の栗拾い」、「元住吉のいちさく狩り」、「多摩川園」二枚、「多摩川畔のピクニック」、「二子玉川」、「玉川児童園」、「洗足池のカヌー」、「網島三ツ池」、「三ツ池のピクニック」、「網島温泉直営浴場」）</li> </ul>	寺田氏寄贈資料
<p>（自）昭和14年3月10日の玉川児童園（玉川第二遊園地）→読売遊園への改称後。</p> <p>（至）昭和14年10月16日の目蒲電鉄の社名変更前。</p> <p>※「つつじ人形」呼物期間（～5月31日）を鑑みて昭和14年5月31日までカ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ハイキング（四コース）</li> <li>・春ノ沿線</li> <li>・写真（「二子玉川の桜」、「多摩川園の桜とつゝじ人形」、「ボート遊びの洗足池」、「三ツ池」、「桃と桜の網島温泉」、「砦の渡」、「よみうり遊園のチュウリップ大花苑」）</li> </ul>	寺田氏寄贈資料
<p>沿線図下に掲載の日曜表による。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ハイキング（四コース）</li> <li>・秋のみのり</li> <li>・玉川畔の大壮観 よみうり遊園 秋草大花苑</li> <li>・多摩川園の菊人形</li> <li>・写真（「ハイキング」二枚、「二子玉川」、「丸子多摩川」、「洗足池」、「三ツ池」、「栗拾い」、「芋掘り」、「秋草大花苑」、「多摩川園の菊人形」）</li> </ul>	沿革史資料 12336-05
<p>（自）昭和14年10月16日の目蒲電鉄の社名変更後。</p> <p>（至）昭和15年12月1日の大井町線二子玉川駅→二子読売園駅への改称（大井町線二子玉川駅・玉川線よみうり遊園駅統合）前。</p> <p>※掲載内容より昭和15年春頃カ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ハイキング（四コース）</li> <li>・写真（「二子玉川」、「太尾公園」、「三ツ池」、「丸子多摩川」）</li> </ul>	沿革史資料 13470-24
<p>（自）昭和14年10月16日の目蒲電鉄の社名変更後。</p> <p>（至）昭和15年12月1日の大井町線二子玉川駅→二子読売園駅への改称（大井町線二子玉川駅・玉川線よみうり遊園駅統合）前。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・野釣り</li> <li>・釣り堀</li> <li>（・多摩川釣り場案内</li> <li>・鶴見川釣り場案内</li> </ul>	寺田氏寄贈資料

資料番号	資料画像	資料名	発行者 (記載住所)	刊記の有無・ 推定発行時期
25		秋の案内	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 玉川電鉄株式会社	刊記なし 昭和11年 (1936) 10月22日 ～ 昭和14年 (1939) 3月9日
26		春の沿線	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 (東京市渋谷区大和田町一番地)	刊記なし 昭和14年 (1939) 3月10日 ～ 昭和14年 (1939) 5月31日
27		秋の御案内	東京横浜電鉄株式会社	刊記なし 昭和14年 (1939) 9月 ～ 昭和14年 (1939) 11月
28		ハイキング	東京横浜電鉄株式会社	刊記なし 昭和15年 (1940) 春
29		つり	東京横浜電鉄株式会社	刊記なし 昭和14年 (1939) 10月16日 ～ 昭和15年 (1940) 11月30日

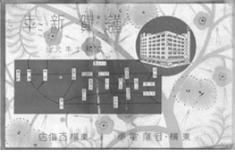
推定理由	情報掲載面記載項目（右から順）	所蔵先
刊記による。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ハイキング（八コース）</li> <li>・ボート</li> <li>・多摩川オリンピック</li> <li>・輝く大東亜博覧会</li> <li>・読売落下傘塔</li> <li>・オコサマのよみうり遊園</li> <li>・写真（「太尾公園（三ツ池コース）」、「丸子多摩川（多摩川コース）」、「大山（大山コース）」、「二子玉川（碓コース）」、「中津溪谷」、「洗足池のボート」、「塔ヶ嶽頂上（丹沢コース）」、「三ツ池のボート」、「輝く大東亜博覧会」、「読売落下傘塔」、「オコサマのよみうり遊園」）</li> </ul>	沿革史資料 12296-22
<p>（自）昭和15年12月1日の大井町線二子玉川駅→二子読売園駅への改称（大井町線二子玉川駅・玉川線よみうり遊園駅統合）後。</p> <p>（至）昭和17年5月1日の東京急行電鉄へ改称前。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・沿線名所案内</li> <li>・沿線四季の行楽</li> <li>・沿線ハイキング案内（四コース）</li> <li>・沿線スポーツ案内</li> <li>・旅客運賃表（渋谷駅～桜木町駅、目黒駅～蒲田駅、大井町駅～二子読売駅、五反田駅～蒲田駅）</li> <li>・玉川線旅客運賃表（下高井戸駅～渋谷駅）</li> <li>・玉川線団体割引</li> <li>・団体割引</li> <li>・写真（「多摩川園」、「多摩川園のつつじ人形」、「多摩川園の菊人形」、「温室村」、「三ツ池のボート」、「いちご摘み」、「よみうり遊園のチューリップ」、「よみうり遊園の大菊花苑」、「よみうりパラシュート塔」、「多摩川ハイキング」、「よみうり遊園のプール」、「大倉山天然スケート場」）</li> </ul>	沿革史資料 12645-32
<p>（自）大正12年5月4日の池上線池上駅～雪ヶ谷駅間開通後。</p> <p>（至）大正15年8月6日の池上線慶大グラウンド前駅開業前。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・池上電車沿線御案内（写真四枚有り）</li> <li>・旅客運賃表（雪ヶ谷駅～蒲田駅）</li> <li>・各種乗車券割引賃率表</li> <li>・学生団体割引表</li> <li>・学生定期割引表</li> <li>・沿線に於ける主なる年中行事（月日／行事／関係停車場）</li> </ul>	寺田氏寄贈資料
<p>（自）昭和2年8月28日の東横線渋谷駅～丸子多摩川駅間開通後。</p> <p>（至）昭和3年5月18日の東横線高島駅開業前。</p> <p>※丸子多摩川駅～渋谷駅間は開通していないが、完成間近のため赤線で掲載カ</p> <p>※株式の受け渡し・売り出し期間より昭和2年8月中（15日まで）カ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京横浜電鉄会社の現在及将来（東京横浜電鉄会社の重役／東京横浜電鉄の目的／本会社の電鉄線路／本会社経営の田園都市／売出要項／本会社の所要資金／増資の目的／増資後の営業状態／東洋第一の電鉄会社／本株式会社への投資価値）、申込証</li> </ul>	寺田氏寄贈資料

資料番号	資料画像	資料名	発行者 (記載住所)	刊記の有無・ 推定発行時期
30		アルキマセウ	東京横浜電鉄株式会社	刊記あり 昭和17年(1942) 4月10日
31		沿線案内	東京横浜電鉄株式会社 (渋谷区大和田町一番地)	刊記なし (※「昭和14年12月許可」とある) 昭和15年(1940) 12月1日 ～ 昭和17年(1942) 4月30日
32		池上電車案内	池上電気鉄道株式会社	刊記なし 大正12年(1923) 5月4日 ～ 大正15年(1926) 8月5日
33		東京横浜電鉄株式会社新株式売出	東京横浜電鉄 山一証券株式会社	刊記なし 昭和2年(1927) 8月 (～8月15日)

推定理由	情報掲載面記載項目（右から順）	所蔵先
<p>(自) 昭和2年8月28日の東横線 渋谷駅～丸子多摩川駅間開通後。 (至) 昭和3年5月18日の東横線 高島駅開業前。</p>		寺田氏寄贈資料
<p>(自) 昭和3年10月15日の東横線 横浜駅開業後。 (至) 昭和4年10月22日の東横線 九品仏駅→自由ヶ丘駅へ改称前。 ※横浜駅～桜木町駅間は開業して いないが、宣伝のため実線で掲 載カ</p>		沿革史資料 6435-01
<p>(自) 昭和3年10月15日の東横線 横浜駅開業後。 (至) 昭和4年11月1日の大井町 線自由ヶ丘駅～二子玉川駅間の開 通前。 ※ただし、網島温泉駅が「網島駅」 表記</p>		寺田氏寄贈資料
<p>大倉精神文化研究所鎮礎式開催日 による。</p>		沿革史資料 1352-01-02
<p>葉書の種類による。</p>		沿革史資料50844
<p>(自) 昭和2年7月15日の玉川線 支線である溝ノ口線開通後。 (至) 昭和7年5月の東京ゴルフ 倶楽部の朝霞への移転前。</p>		沿革史資料 13470-06

資料番号	資料画像	資料名	発行者 (記載住所)	刊記の有無・ 推定発行時期
34		出荷用ラベル (「網島之桃 品質優良」)	網島果樹園芸組合	刊記なし 昭和2年(1927) 8月28日 ～ 昭和3年(1928) 5月17日
35		東京横浜電鉄株式会社事務用箋 (「大倉精神文化図書館建築用砂利数量金額表」)	東京横浜電鉄株式会社	刊記なし 昭和3年(1928) 10月15日 ～ 昭和4年(1929) 10月21日
36		東京横浜電鉄株式会社宣伝チラシ (「東京 横浜 近道」)	東京横浜電鉄株式会社	刊記なし 昭和3年(1928) 10月15日 ～ 昭和4年(1929) 10月31日
37		鎮礎式記念絵葉書	大倉精神文化研究所	刊記なし 昭和5年(1930) 4月9日
38		金坂吉三葉書(「謹賀新年昭和六年元旦」)	金坂吉三 東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社	刊記なし 昭和6年(1931)
39		玉川電車沿線案内図	玉川電気鉄道株式会社	刊記なし 昭和2年(1927) 7月15日 ～ 昭和7年(1932) 5月

推定理由	情報掲載面記載項目（右から順）	所蔵先
葉書の種類による。	/	沿革史資料55171
葉書の種類による。	/	沿革史資料61363
<p>（自）昭和8年7月10日に池上電鉄が日蒲電鉄の傘下に入った後。 （吸収合併は昭和9年10月1日） （至）昭和10年11月1日の池上線支線である新興沢線廃止前。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・網島温泉浴場より各主要駅間入浴券回数券発売</li> <li>・浴効</li> <li>・網島温泉浴場一覧表</li> <li>・網島温泉駅より電車賃及所要時間</li> <li>ほか施設内写真八枚掲載等</li> </ul>	寺田氏寄贈資料
資料中の「非常時護国祈願並関東大震災物故者十三回忌追善供養」の文言に加え、開扉期間が「十月十日より十一月十一日まで」とあることによる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・御便利な巡拝割引乗車券発売（出開扉期間中）</li> <li>・観音霊場札所巡拝集印の絶好期</li> </ul>	沿革史資料 13566-05
<p>（自）昭和11年4月1日の東横線碑文谷駅→青山師範駅への改称後。 （至）昭和11年10月22日に玉川電鉄が東横電鉄の傘下に入る前（吸収合併は昭和13年4月1日）。</p> <p>※売出要項中での特売期間が9月17日～9月30日</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・概要・定期乗車券及所要時間</li> <li>・菊名住宅地売出要項</li> <li>・新神奈川住宅地売出要項</li> <li>・菊名に就いて</li> <li>・土地譲渡契約要旨</li> <li>・写真（「分譲地ヨリ大倉山方面ヲ望ム」、「菊名分譲地ノ一部」二枚、「新神奈川分譲地の一部」二枚）</li> </ul>	寺田氏寄贈資料

資料番号	資料画像	資料名	発行者 (記載住所)	刊記の有無・ 推定発行時期
40		東京横浜電鉄葉書 (「謹賀新年 昭和八年元旦」)	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社	刊記なし 昭和8年(1933)
41		五島慶太葉書 (「謹賀新年 昭和十年元旦」)	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社	刊記なし 昭和10年(1935)
42		網島温泉浴場案内	東京横浜電鉄株式会社	刊記なし 昭和8年(1933) 7月10日 ～ 昭和10年(1935) 10月31日
43		観音霊場西国三十三札所京 浜東横沿線出開扉	主催：西国札所東京 出開扉奉賛会 後援：京浜電気鉄 道株式会社 東京横浜電 鉄株式会社	刊記なし 昭和10年(1935) 10月10日 ～ 昭和10年(1935) 11月11日
44		菊名・新神奈川住宅地案内 (特別三割引)	東京横浜電鉄株式 会社 目黒蒲田電鉄株式 会社 田園都市課 (渋谷区大和田町一)	刊記なし 昭和11年(1936) 4月1日 ～ 昭和11年(1936) 9月30日

推定理由	情報掲載面記載項目（右から順）	所蔵先
<p>(自) 昭和9年11月1日の東横百貨店開業後。 (至) 昭和11年の原村梅園閉園前。</p>	/	寺田氏寄贈資料
<p>(自) 昭和7年3月31日に東横線桜木町駅開業後。 (至) 昭和14年10月16日の目蒲電鉄の社名変更前。</p>	/	寺田氏寄贈資料
<p>(自) 昭和8年7月10日に池上電鉄が目蒲電鉄の傘下に入った後。 (吸収合併は昭和9年10月1日) (至) 昭和14年10月16日の目蒲電鉄の社名変更前。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>(・網島温泉概要)</li> <li>(・網島温泉旅館一覧・電話番号)</li> <li>・絶好のピクニックコース（太尾公園～網島温泉）</li> <li>・附近名所</li> <li>・電車賃及時間</li> <li>・網島温泉</li> </ul>	寺田氏寄贈資料

資料番号	資料画像	資料名	発行者 (記載住所)	刊記の有無・ 推定発行時期
45		東横百貨店包装紙	東横百貨店	刊記なし 昭和9年(1934) 11月1日 ~ 昭和11年(1936)
46		元住吉のいちぐり狩り	東京横浜電鉄株式会社運輸課 目黒蒲田電鉄株式会社運輸課	刊記なし 昭和7年(1932) 3月31日 ~ 昭和14年(1939) 10月15日
47		網島温泉	東京横浜電鉄株式会社 目黒蒲田電鉄株式会社 池上電鉄株式会社	刊記なし 昭和8年(1933) 7月10日 ~ 昭和14年(1939) 10月15日

## 【年表】

年	月日				その他施設	
明治36年 (1903)	10月4日	(神奈川線・渋谷線→東横線)	東横電鉄	目黒電鉄 (目黒線・蒲田線・大井町線)	池上電鉄(池上線・支線新興沢線) 玉川電鉄(玉川線・支線大現寺橋線 ・支線碓氷線・支線下高井原線・支線 中目黒線・支線御月線)	
	明治40年 (1907)					
	4月1日				玉川線・道玄坂上駅～三軒茶屋駅 間が開通。	
	8月11日				玉川線・三軒茶屋駅～玉川駅間が 開通。	
明治43年 (1910)	6月22日		武蔵電気鉄道株式会社が創立。		玉川線・渋谷駅～道玄坂上駅間が 開通。	
大正5年 (1917)	10月				池上電鉄株式会社が創立。	
大正7年 (1918)	1月					
	9月2日		荏原電気鉄道株式会社が創立。 田園都市株式会社が創立。			
大正9年 (1920)	5月11日		五島慶太が武蔵電気鉄道常務取締 役に就任。			
	6月11日			目黒蒲田電鉄株式会社が創立。 五島慶太が目黒電鉄取締役に就任。	大現寺橋線・渋谷駅～渋谷橋駅間 が開通。	
大正11年 (1922)	9月2日					
	10月6日			目黒線・丸子駅(沼部駅)～目黒 駅間が開通。	池上線・蒲田駅～池上駅間が開通。	
大正12年 (1923)	3月11日					
	5月4日			蒲田線・蒲田駅～丸子駅(沼部駅) 間が開通。	池上線・池上駅～雪ヶ谷駅(初代) 間が開通。	
	11月1日			目黒線 ～目黒線 の全通。		

大正13年 (1924)	3月1日			船橋・玉川駅～船駅間が開通。	
	5月1日				大岡山駅前(現 東京工業大学)が開校。
大正14年 (1925)	5月21日			天現寺橋線・渋谷橋駅～天現寺橋 駅間が開通。	
	10月7日	武蔵電気鉄道が目蒲電鉄の傘下に 入る。	武蔵電気鉄道が目蒲電鉄の傘下に 入る。		
	10月25日	「東京横浜電鉄株式会社」へ商号を 変更。			
大正15年 (1926)	1月18日			下高井戸線・三軒茶屋駅～世田谷 駅間が開通。	
	5月1日			下高井戸線・世田谷駅～下高井戸 駅間が開通。	
	12月23日				多摩山園が開園。
昭和2年 (1927)	1月1日		目蒲線多摩川駅→丸子多摩川駅へ 改称。		
	2月14日	神奈川線・丸子多摩川駅～神奈川 駅(初代)間が開通。 目蒲線と相互乗り入れし、目黒 ～神奈川駅間が開通。	神奈川線と相互乗り入れし、目黒 駅～神奈川駅間が開通。		
	8月6日			池上線・慶大グラウンド前駅が開業。	
昭和2年 (1927)	3月10日	神奈川線・東臼薬駅が開業。			
	3月29日			中目黒線・渋谷橋駅～中目黒駅間 が開通。	
	4月				練馬温泉が開湯。
	6月2日			池上線・光明寺駅が廃止。	
	7月6日		大井町線・大井町駅～大岡山駅間 が開通。		
	7月15日			溝ノ口線・玉川駅～溝ノ口駅間が 開通。	
	8月28日	渋谷線・渋谷駅～丸子多摩川駅間 が開通。 →渋谷駅～神奈川駅間の開通。東 横線と呼称。		池上線・雪ヶ谷駅(初代)～桐ヶ 谷駅間が開通。	

年	月日				その他施設
昭和3年 (1928)	10月9日			池上線・桐ヶ谷駅～大崎広小路駅間が開通。	
	12月25日				渋谷東横食堂(第一東横食堂)が開業。
	4月13日			池上線・石川駅→石川台駅へ改称。池上線・宋広駅→東調布駅へ改称。	
	5月18日	東横線・高島駅(計画時は高島町駅)が開業。		池上線・大崎広小路駅～五反田駅間が開通。	
	6月17日				
昭和4年 (1929)	8月1日		目蒲線・西小山駅が開業。		
	8月3日	東横線・高島駅→本横浜駅へ改称。			
	9月		大井町線・二子玉川駅～大井町駅間開通工事着手。		
	10月5日			池上線の支線である新奥沢線が開通。雪ヶ谷駅(初代)が廃止。雪ヶ谷駅(二代目)が開業。	
	10月10日		大井町線・池月駅が開業。		
昭和4年 (1929)	10月15日	東横線・神奈川駅(二代目)、横浜駅が開業。			
	7月3日				慶應義塾大学予科(のちの慶應義塾高等学校、現慶應義塾大学日吉キャンパス)の日吉への移転決定。
	9月21日				日星東横食堂(第二東横食堂)が開業。
	10月22日	東横線・九品仏駅→自由ヶ丘駅へ改称。	(東横線・九品仏駅→自由ヶ丘駅へ改称。)		
	11月1日		大井町線・九品仏(九品仏前との表記も有)駅が開業。自由ヶ丘駅～二子玉川駅間が開通。		

	12月25日		大井町線・中丸山駅が開業。大岡山駅～自由ヶ丘駅間が開通。 →二子玉川駅～大井町駅間の開通 ＝大井町線の全通。		
昭和5年 (1930)	4月1日		大井町線・尾山台駅が開業。		
	5月21日		目蒲線・矢口駅→矢口速駅へ改称。 大井町線・池月駅→洗足公園駅へ改称。		
昭和6年 (1931)	1月1日	東横線・丸子多摩川駅→多摩川園前駅へ改称。			
		東横線・妙蓮寺前駅→妙蓮寺駅へ改称。			
	1月20日	東横線・本横浜駅が廃止。 東横線・高島町駅が開業。			
3月					日本医科大学予科（現日本医科大学武蔵小杉病院ほか）の新丸子駅近辺への移転決定。
	7月25日	東横線・柿ノ木坂駅→府立高等前駅へ改称。			
昭和7年 (1932)	1月				玉川ゴルフコースが開場。
					大尾公園が開園。
	3月31日	東横線・大尾駅→大倉山駅へ改称。 東横線・府立高等前駅→府立高等駅へ改称。 東横線・桜木町駅が開業。			大倉精神文化研究所が開所。
	4月9日				日本医科大学予科（現日本医科大学武蔵小杉病院ほか）が開校。
	4月11日				東京府立高等学校が開校。
4月26日					東京ゴルフ倶楽部が埼玉・朝霞へ移転。
5月					

年	月日	東横電鉄 (相模山線・渋谷線→東横線)	目蒲電鉄 (目黒線・蒲田線・大井町線)	池上電鉄 (池上線・支線新奥沢線) 玉川電鉄 (玉川線・支線大塚守播線 ・支線高線・支線下高井戸線・支線 中目黒線・支線溝ノ口線)	その他施設
昭和8年 (1933)	10月1日				大崎町が東京市品川区に編入。
	10月				玉電食堂が開業。
昭和9年 (1934)	4月1日		大井町線・中丸山駅→緑ヶ丘駅へ 改称。		青山師範学校 (現東京学芸大学) の博文谷駅近辺への移転決定。 駒沢ゴルフコース (至18ホール) 設置。
	6月1日				玉川ゴルフコース→等々力ゴルフ コースへ改称。
	7月10日		池上電鉄が目蒲電鉄の傘下に入る。	池上線・御墓山前駅→御旗山駅へ 改称。	慶應義塾大学予科 (のちの慶應義 塾高等学校・現慶應義塾大学日吉 キャンパス) が開校。
昭和10年 (1935)	5月		池上電鉄が目蒲電鉄に吸収合併さ れる。	池上電鉄が目蒲電鉄に吸収合併さ れる。	東横百貨店が開店。
	10月1日				田園調布駅の東側に田園テニスコ ム部設置。
	11月1日				青山師範学校 (現東京学芸大学) が開校。
昭和10年 (1935)	11月3日				多摩川園が読売新聞社との提携で 菊入形大会開催。
	4月				以降、恒例行事に。
	秋				池上線の支線である新奥沢線が廃 止。
	11月1日				

昭和11年 (1936)	1月1日	目蒲線・本門寺道駅→道塚駅へ改称。 大井町線・蛇窪駅→戸越公園駅へ改称。 池上線・戸越駅→下神明駅へ改称。 大井町線・洗足公園駅→北千束駅へ改称。	池上線・東調布駅→久ヶ原駅へ改称。 池上線・鷹大グラウンド前駅→千鳥町駅へ改称。	大倉山スタクト場をリニエータル(開設自体は昭和3年、リニエータル用資金の融資は昭和10年)。 多摩川園がつつじ人形展開催。 以降、恒例行事に。
	1月			
	春			
	4月1日	東横線・碑文谷駅→青山師範駅へ改称。		田園観光スタクト(のちの田園コロニア)設置。
	10月3日			
昭和12年 (1937)	10月22日	玉川電鉄が東横電鉄の傘下に入る。	玉川電鉄が東横電鉄の傘下に入る。	原村柳園が工場用地として没収(閉園)。 東横目蒲電鉄事務所を渋谷区大和田町一番地へ移転。
	2月26日			
	6月1日		池上線・調布大塚駅と雪ヶ谷駅が合併し、雪ヶ谷線が開業。 玉川線と玉川線支線である天現寺線の軌道を分離。玉川線は渋谷駅、天現寺線は東横百貨店前駅が発着に変更。	
昭和13年 (1938)	7月27日	玉川電鉄が東横電鉄に吸収合併される。	玉川電鉄が東横電鉄に吸収合併される。	
	4月1日			
	7月27日		玉川線支線である天現寺橋線・中目黒線が東京市電氣局に委託される。	日吉ゴルフ倶楽部が創立。
	11月19日			

年	月				その他施設
昭和14年 (1939)	3月10日	東横電鉄 (相模川線・渋谷線→東横線)	目蒲電鉄 (目黒線・蒲田線・大井町線)	池上電鉄(池上線・支線新奥東横線) 玉川電鉄(玉川線・支線大坑守播線 ・支線高線・支線下高井戸線・支線 中目黒線・支線糠ノ口線)	玉川児童園(玉川第二遊園地)→ 読売遊園→改称。
	4月10日				東横商業女学校が創立。
	6月22日				東横神社遷座。
	10月1日	東横電鉄と目蒲電鉄が合併。	東横電鉄と目蒲電鉄が合併。		
	10月16日	社名が「東京横浜電鉄株式会社」 へ変更。	社名が「東京横浜電鉄株式会社」 へ変更。		
	12月11日	東横線・工業部町駅が開業。			
昭和15年 (1940)	3月				五反田東横映画劇場が開館。 東横学園(のちの学校法人東横学園) が創立。 東横商業女学校→東横女子商業学 校へ改称。
	12月1日		大井町線・二子玉川駅→二子読売 園駅へ改称。 (大井町線・二子玉川駅・玉川線よみ うり遊園駅が統合)	大井町線・二子玉川駅→二子読売 園駅へ改称。 (大井町線・二子玉川駅・玉川線よみ うり遊園駅が統合)	
昭和17年 (1942)	5月1日	京浜電気鉄道・小田原急行鉄道が 合併。「東京急行電鉄」へ変更。 社名が「東京急行電鉄」へ変更。			
昭和18年 (1943)	2月				京浜デパート→京浜百貨店へ改称。
	7月1日		二子読売園駅・二子新地前駅・高 津駅・津の口駅が玉川線から移管。	二子読売園駅・二子新地前駅・高 津駅・津の口駅を目蒲線へ移管。	
昭和19年 (1944)	12月1日	東横線・青山師範駅→第一師範駅 へ改称。 東横線・府立高等駅→都立高等駅 へ改称。			
	5月31日	京王電気軌道が合併。 →「大東急」の誕生。			

【参考文献】

- ・宮田道一 「東急の駅今昔・昭和の面影」(江頭誠・JTBC「フリップ」マガジン)発行、平成20年8月7日)
- ・萩原二郎・宮田道一・関田克孝 「回想の東京急行Ⅱ」(大正出版株式会社発行、平成13年5月15日)
- ・萩原二郎・宮田道一・関田克孝 「回想の東京急行Ⅰ」(大正出版株式会社発行、平成14年8月5日)
- ・「東急電鉄記録写真集 街と駅 80年の情景―東横線・池上線・大井町線80周年記念フォトブック―」(渡辺淳・株式会社東急エージェンシー 出版部発行、平成20年5月2日)
- ・東京急行電鉄社内報 「清和」
- ・「東京急行電鉄50年史」(杉本寛一編集、杉本寛一・東京急行電鉄株式会社発行、昭和18年3月25日)
- ・「東京急行電鉄50年史」(東京急行電鉄株式会社史編纂事務局編、東京急行電鉄株式会社史編纂委員会発行、昭和48年4月18日)
- ・「東急100年史」WEB版 (<https://www.tokyo.co.jp/history/>)